日記

一九一六年 (大正五年)

宮本百合子 青空文庫

一月一日(土曜)

〔書信〕大久保明子

〔読書〕私は今日一日何も読まなかった事を

恥じる。

之から新らしい一年が始まると云う事については又新らしい幸福な勇気が自分に湧き上

って来るのを感じる。

母としての人の云う事、 久米さんが来てこの間から私の頭をなやまして居た人類の愛と云う事について話が出た。 一人の男として思う事をのべる人との間には異った点があんま 1)

大きい。

私は考えはあくまでもねられなければならないと云う考えから出来るだけ考える。 考える事は私にとって今は労力の消費をはげしくするにすぎないと云う人もあるけれ共、 以て始められた此の一年は私にとって意味深い事である。 自分は 何か自分の考えを得なければならないと思う事が苦しい位明かに思われて来る。 思索を

月二日 (日曜)

(来) 高嶺

返 同 右 大久保 小 田

切

パ

〔読書〕

「宇宙

「の謎」

を

兀 +

頁、

戦

リー」を少し、 兀 1十三頁

ある。 ある。 て世 的に書いてあってよく分って宇宙と云うものが 釈をしてもかまわないので有る。 ての事を神秘説で被うには及ばない。 必ずそうではない。 考えるのはい 「宇宙の謎」 の中はつまらなくなるものではない、 今まで極くおぼろげなものであった宇宙と云うものをこの本を読んで恐ろしく学理 私はすべてを学理的に理解して確な踏み台に立って世の中を見るべきである。 を読みながら思った。 くらでもよい、 却 ってたしかに親なら親を知り宇宙なら宇宙を知り得るので快 親と云うものにつき自分と云うものにつきどんな学理的な けれ共学理的に解剖した事は実生活に不都合かと云うに 私共は考えずには居られない人間に生れついて居る。 有りのままを静かに見るべきである。 又そうならない 確かに自分の見る宇宙になった。 解釈でなければ正しくないので その結果とし 世 いいので のすべ 解

一月三日 (月曜)

〔書信〕坂本千枝子へ出

巨勢春野返

〔読書〕「戦争トパリー」一一三頁〔読書〕「宇宙の謎」三十頁

書き掛けの物をいつまでも持って居るのは辛いものだ。

(八)十六枚を書きあげる。

今日は去年最後の産物だった「二十三番地」と「追憶」 を父が箱根の次手に熱海に居らっいで

れる坪内さんの所へ持って行って下さる筈になった。

相当に物も読んだし書きもしたので満足である。

生活に着物と云うものの占めて居る位置のつよさにおどろく。 彼の大きく出来すぎた袖模様の羽織が又母との感情の不和の原因に今日もなった。 寿江子が大変私に機嫌がよ 女の

かった。嬉しい事である。

一月四日(火曜)

久米正雄氏より

『帝国文学』、

手紙

長者の心に悲しくさせられる。 な 芽生のある巴子と、メフィステックな音彦と、 面白い それにつけてよこして呉れた手紙は又私共の感情をかき乱すものになっ 久米さん 巴子が一番よく出て居る。 ものである。 の所から「金井博士とその子」と云う劇を送って呉れる。 兎に角 「牛乳屋の兄弟」より一番何となし劇的効果 一番力を入れて書いた人物だからでも有ろうけれ共恋心 夜父からの贈物の花瓶を見つける。 おっかけっこのおとぎ話は 一番音彦と云う息子 た。 のあ いかに、 る作 無同情な年 も 印 で ある。 象 Ō 的

一月五日 (水曜)

〔書信〕坂本千枝来

ると、 大風が木枯しの空を吹き荒れる。 種異様な感に打たれる。 種々な分らない事を抱えて、 黄枯れた梢が淋しく晴れた空の下に揺れて居るのを見 毎日、 毎日思うより幾分の

外仕 今日 から三日掛って、 事 の出 来ない日を送って居る事は辛い。 「お久美さん」を書き上げなければならないと思うので、

っかりと十だけをまとめた。百三十八枚ある。 自己反省の多い人間は悲しみが多い。 九のす 考え

思わ に堪える自分を作る事は必要だろうかと云う事は思われて居る。 なければならない様に生れついて居る人々は淋しい。 人 (異っ れ て来る。 た考えを持って居るのを思うと、 確かな自己をとり守って、 やがて大きな自己拡張を行いたいと思う。 真に一人一 人の人間の集合だと云う事は 多勢の人間が集まって居ながら一人 明 苦難 がに

月六日 (木曜)

私は 無自覚ではな 残そうとするときに余りする事が少なかったとき、 日は早く起きてさっさと仕様とその事はつくづく思わずには居られない。 ろうかと云う事は疑問になって来る、 るだけでもどの位私をすすめて行く事か知れない。 って居る。 日記を付けると云う事は一日を尊重する気持を起させる。寝る前にその日一日の記録を 自分の生きて居る歓びを感じて居るのである。どこまでも育てなければならない。 けれ い。 共それが毎日どれだけ私の実質を作って行くかと思うと情なくなる。 少くとも自分の力を或る程度までは頼って居る。それが有るば 私は人より勉強して居ると思って居る、 考える事の貧しかったときは恥 私は確かに自分を大切に育てて居るだ 考えると思 つか を感じ 私は りで 明

一月七日(金曜)

[読書] 「人類の過去現在及び未来」、「宮

教心理学」、Fantoms

が始まる。 めたもののな 夜になってから非常に気が滅入ってたまらなくなった。借りてきた五冊 却って規則正しい一 らい事、 今日 日何にも書かなかった事が私を非常にせめた。 日が送れて私にはよい。 の中、 明日から又学校 満足によ

思ってやるに限る。そうすればきっと成就するものである。 ない文法が不安の様にもあるけれ共、 三月になると入学試験になるから今から勉強しなければならない。 仕て出来ない事はあるまいと思う。 一番はっきりして居 兎に角出来ると

明日半日掛ってあさってにかけて、書きかけを出来さなければならない。

| 貧しき人々の群」はかなり醸されて居る。

不満だらけになって来るので辛くもある。

月八日 (土曜) 植物園に英男と行く。 非常におだやかな寒とは思わ 〔読書〕 「宇宙の謎」 四十四頁 れない。 文法、

リー

事が多い。 好い事にも悪い事にも臆病である。 はきと出来ずまして悪事もせいぜい小悪戯をする位の所では情なくなって仕舞う。 はっきり神に対する考えを得た何よりうれしい。今日はつくづく思って居た事だが も確かに変った事が起って来るに違いない。 くどうぞ此の気の毒な私の育ちます様にその事を、 「小さい子供」十枚を書く。 始業式出席、 もう少し勇気があらなければならない。ほんとに力が足らない。 又努力の事について話が有った。 「宇宙の謎」を読んで「神は宇宙と一体なり」と云う言葉で 私等は思って居てそうしたがりながら出来ない 植物園へ行って、珍らしく好い気持になった。 私は又深く考えさせられる。 無限の空間を充たして居る不変のエネ 好い事もはき 今年は私に 勇ま ・で居る 私共は

月九日(日曜)

ルギーに祈る。

〔読書〕文法、「十八史略」、「人及芸術家

としてのトルストイ並にドストイェ

フスキー」

は「これからはだまってどしどし進んで行こう」と云うよろこびでときめいて居るのであ なって居る。 事をはじる。 思えばいやな事は 好いのである。 で仕様、 れる丈余裕のある人間でならねばならなかった。私は学校のだけの事にはすべてよろこん までの自分であった事を恥じる。 今日は実に私は自分の力の足りない事を感じた。きらいな事は出来ないと云うせまい 寡言にドシドシ進んで行こう。 今日思って居た事は大勢来た客のために大方は拒えぎられたけれ共、 私は今日非常に平和である。 確な自分を作るために何事をも辞すまい。 ないはずである。 小さい事でもそれは何物かを私に教えるものである事を 自分の身の囲りに起って来た事すべてを引きうけてや 私の集られて居る多くの女達に私は介って居ずと 心に余裕がある。 切実な自己反省のたらなかった 私は人を大切にされる 気持に 私の 心

月十日 (月曜)

る。

〔読書〕「人及芸術家としてのトルストイ並

にドストイェフスキー」、テニソン

のソネット四、Fantoms

居る。 居る 非常 生へ手紙を書こう。この頃の内 彼れを去年の九月だかに書いてそれから三月の日の進みの中に少しずつなり自分が 心の声を聞いていただこう。今日一 する自分の意志を発表するにあれではあまり浅薄すぎて恥かしいなおさなければならない。 「お久美さん」のつづきを書いて仕舞いたいが出来ないで居る。 大変に強い風が吹いて行く。 に私 のが分ればうれしい。 け れ共どうせ仕なければならないんだからよろこんでするのである。 の心は落 つい て居る。 今日は下らない用事のために私の思って居たことは出来 雪にでもなりそうな引きしまった不安が満ちた夜である。 心の動揺を云わずには居られない。 しなければならない事は沢山あるがゆったりし 日はかなり今までよりはよい一 「追憶」の中 日を送ったことであっ 私の愛して居る先生へ 明日は の宗教に て居られる。 千葉先 進ん な で で 対

一月十一日(火曜)

明日は又今日よりよくあります様に。

〔読書〕「人及芸術家としてのトルストイ並

びにドストイェフスキー」、

ms

来た。 自由 私は千葉先生に対しての愛情がはげしくはげしく動いて居る。 だけである。 あげなければならない。 小此木先生に行く。 題」を書 あれ丈の素直さをもって書いたものが何にも気をつけられずに月日を記入なさいと 「いた。 千葉先生に云って上げたいと思わずには居られない。 私の内心には或る力が満ちて居る。 文法の動詞の変化をさらって行く事になった。 夜はじきにねた。 今日まで不寝がつづきすぎた。 静かにじりじりと努力して行ける。 明日は書きかけのものを仕 作文「三十日の 今日反省録が返って 町 中

月十二日 (水曜)

(書信) 千葉先生へ出す

(読書) 「人及芸術家としてのトルストイ並

にドストイェフスキ j

歯が痛むので何にも仕たくない。 舌でさわって見ると、 歯と歯の間に何 かがはさまった

様に肉が飛び出て居る。

又榎本さんへ行かずばなるまい。 気がふさいで、 仕なければならない事が山程あってもするのがいやである。 明日帰りに

いそがしいのに気分を悪くさせては置けない。

今日も亦何も書かずに仕舞うのかと思うとたまらなくなる。

もう二三ヵ月ほかないのにどうするのかと云う様な気になって来る。

ああ歯が 四月の一日に発行できる様に仕たいと思いは思ってもなかなかむずかしい。 ζ, たい。 何も考える事も何も出来やしない。

一月十三日(木曜)

ほ

んとにいやになる。

[読書] 「人及芸術家としてのトルストイ並

にドストイェフスキー」

今日は朝から歯が非常に痛んで殆ど堪えられなかった。

体の一 部に故障のあると云う事はまるで私の生活を真面目さから奪って仕舞って、

中に暮して仕舞った。

甲斐もなく痛みは止まらなかったので、家へ来るとすぐ床に就いて仕舞った。 りに榎本へ行ったけれ共歯ぐきを切られたり電気をかけられたりして辛い思いをした

ろくに物もよまず書きもしずに一日を送った事が非常にくやまれた。

けれ共肉体的の苦痛には堪えられなかった。

一月十四日(金曜)

〔読書〕「西洋哲学史」、「人及芸術家とし

てのトルストイ並にドストイェフス

キー」

久米氏来訪。 先達っての手紙の事から種々の議論が百出した。

私の頭は非常に掻き乱された。

又新らしい苦痛が湧いた。

人間 の集団としての世の中に生きて居る私共は箇こを確かにして行くと云う事を益 感

じた。

益 ドストイェフスキーに対しての新たなる愛情と追憶は、今の興奮した心と一つになって 自己の書いたものに著われて来るすべての点を不満に思わざるを得ない。

勇気に満ちてありたい。 生き抜く力を欲しい。私は私の作品が力強くドシドシと進んで

行きたいのである。 大足に勇ましく我心よ進みてあれ

一月十五日〇(土曜)

けれど、実にあやぶまれる節々が沢山ある。どうしても三百枚にしなければならない。 夜、 例の続きを五六枚書いた。ズーッと読んで見ると、思った程悪くはない様ではある

貧しき人々の群

百枚

鈍色の夢 お久美さんと其周囲 二百枚—

百枚 —920頁

追憶、 二十三番地

六十枚し

「追憶」と「二十三番地」をのぞいた外は皆この三月の中に作って仕舞わなければならな

私は実にうっかりしてのらのらしては居られない。

月十六日 (日曜)

(書信) 小田切秀子

寒く冷たい夜に座して、 私はどんなに相容れざる魂の歎きに沈む事だろう。

私 の周 囲はあくまで二元論者である。 文学を人間以上神に近づいたものとして要求され

て居る私 は苦しい。 私は人間である。あくまで人間である。

所 謂 新らしいと同一視されて居る事を私は悲しまずには居られない。いわゆる

私は辛 これからどの位の苦痛が私を困らせ様と来る事だろう。 静かに涙をたれて自分の行き道をながめやる。

私のたよりになるものは只私ばかりである。

我心よ勇ましく育ちてあれ、我思いよ高まりて行け。

私は私 のみを力に一日一 日を送って行くばかりである。

私は静かに自分の心に祈るのである。

月十七日(月曜)

やんとして坪内先生に持って行っていただかなければならない。もう二十日になれば一月 いと思ったが出来そうにもない。二十日までには今のと、「二十三番地」、 大変強 い風が吹いた。 歯はまださっぱりしない。 続きなおすのをすっかり仕てしま 「追憶」をち いた

はどの位短くすぎて仕舞うのだろう。

二月と三月の中に私はもう二つか三つを書かなければならない。

のである。少し位無理をしたってしなければならない。 どうしても出来せる。 私の踏み出の第一歩としてまとめたものを出す事は無駄ではない

割合にたゆみなく行く足どりを有難く思う。

私は沈黙し、 同情者を得、そしてどしどし進んで行けばよいのである。

月十八日(火曜)

理解されて居ると云う事は真にうれしい事である。 と云う事を信じるのである。 で行って見ると、 千葉先生がこの間の手紙の返事として、 紙に書いたものを下さる。 「帰りにでもいらっしゃい」とおっしゃったの 私の困って居る事、希って居る事をはっきり 千葉先生丈は私の始終の同情者である

りに榎本に行き電車の中で四年の名は知らない人に会うと、擽ったい賛辞を盛に呈せ 薄すべったい頭で人を賞めたり何かされるといやになってしまう。

夜は又歯ぐきが非常に腫れて何もしずに早く寝て仕舞った。

一月十九日(水曜)

学校欠席

般感覚と云うものが如何ほど我々の心に影響を与るかと云うことをはっきりと感じる。

「お久美さんと其周囲」脱稿

非常な満足を以て寝る事が出来る。

去年の暮から仕かけて居た事の出来上った喜びは実に非常なものである。

必して満足の

夢」を入れて仕舞った方がよかろうと思う。 行けば三月までにはどうかこうかまとめる事が出来そうである。 出来る作ではないけれ共まず私の一つの試みである。 お米の事を書きたい気がして居る。 「貧しき人々の群」の中に この分で 「鈍色の

一月二十日(木曜)

学校欠席

非常な不安を感じる。 歯医者に行くと、根に膿がたまって居るから抜かなければならないと云う。 その時の痛みが今はっきりと感じられる。これを思うと十一、二

肉親 満ちて居る。 かった。 の時平気で一年に一度ずつはきっと指をはらして居たのに何とも思わないで切ってもらっ い感激が眠りを欲しない程の興奮を与えて居る。 大学の前から高等学校まで歩いて見た。天気もあったかだったしするので非常に気持っ た事をふしぎに思う。 の愛の快に調和の一時を感じる事が出来た。 大変おだやかな気持で一生懸命明日の会の準備をする事が出来たのを嬉しく思う。 一日でも意味ある日を送れたと云う事は喜ぶべき事である。 病気だとか怪我だとか云う事に非常に臆病になって来て居る。 軽い興奮が体中に流れて恐ろしく精力が 言葉に表わせな 今日 がよ

一月二十一日(金曜)

欠席

呼吸の苦しい様な感情が胸一杯になって居る。何のためか分らない。 私は

書信

久米氏より来信

き出して今月中か或は二月に少しかかってから書きあげなければならないと思う。 いたいと云う事もあるし歯を抜かなければならないと云う不安もある。 の群」を非常によく書きたいと云うのぞみもあるし日曜には坪内さんにつれて行ってもら 二十四日位から書

明日は文法と読書を、

三月になれば入学試験もある事を考えるとうっかりしては居られ

よほどしなければならない。

一月二十二日(土曜)

出席

久米氏に会う

評価 れは 顔をしてオドオドと何かして居るのを見るのも歯がゆい。 したい。 みを感じた。 音楽の時間が休みだったので蜷川さんと、 今日は 出て行きたくなかったのを遂に出かけて行った。 され 私に 種々 るべきものではあるまい。 も欠点は有ろう、 私に遠慮 な感情が私を苦しめたのである。 私がする事に一々口を出して何かと干渉して居られるのも辛 しながら種々 明らかな欠陥を自分も知っては居るけれ共それで私 な影弁慶をして居るのを見るとよけいにくらしくなる、 私の心を苦しめて居る様々の苦困を私のみが噛みこな この頃の心の様子を話し合う。 本田 「三十日の町中」を返してもらう。 の道っちゃんの顔を見てはげし 日も早く広い世の 1 中に のすべてが U 無 飛 いにく び出 そ

してあわれんで行くのみである。

一月二十三日(日曜

漢文の先生。私の心の中には種々な争闘が起って居る。

二つの心と心の衝突、何と云う可哀そうな事であろう。

私は非常に考えなければならない。 私は自分の心の産む沢山の悩みにいじめられて自分を失って居るのである。

気が重くて何も出来ない。

考え方の一変転期にある事を予想するのである。 貧者に対してもって居た気持の偽である

「貧しき人々の群れ」を書き出したのだけれ共一寸も考えがまとまらない。すべてものの

#、偽りの多い生活をして居る事をはずかしく思う。

一月二十四日(月曜)

父上山形出発

何一つまとまった仕事の出来ない心持である。

今日明日の内に私のこの気持をきまりをつけなければならない。

非常な不安と、 淋しさに迫られて、 一時も静かな時のない事は実に苦しい。

私は生き方をかえなければならない必要に迫られて居る。

月二十五日(火曜

欠席

昨夜四時まで道っちゃんと種々な問題に付て話し大変心が安まった。

ない。 上杉博士の憲法の講義を読んで見たい。私はすべての事に明かになって居なければならな 明日からは勉強が出来る。もう一月もすぎて仕舞うのだから実際うっかりしては居られ 先週の土曜から何だか落付かないで仕様がない。 確な心持にならなければならない。

明日は早く起きて学校へ行って勇ましくやりましょうと偽でなく思う。

いのである。

今日は実に落着いた気持である。

Every morning, every night and every-where I must exact myself to the utmost. じある°

一月二十六日(水曜)

〔読書〕「宇宙の謎」読了、「現代思想十六

日でも頭 で出るのにどの位おしいか分らないけれ共、 かはっきりしないのですっかり書けない。 をはっきりさせられた事を非常に愉快に思う。 「宇宙の謎」を読み終った。 「貧しき人々の群れ」を書き出したけれ共この二三日の睡眠不足から頭の工合が のはっきりしない日などはまことに無駄だから今日はもうねるのである。 宗教、 宇宙、 道徳その他すべての事に持って居た自分の考え これからのいそがしい日に若し一日でも二三 頁にも足りないでやめて仕舞う。 「現代思想十六講」は非常 に面白そうであ 部屋 は 暖か 何だ

講

一月二十七日(木曜)

〔読書〕「近代思想十六講」

近代思想十六講」は有益なものである、少くとも私にとっては。

□努力して居ると云う事を明かに知り得た。 序の中の霊と肉の調和、 オナルド・ダブィンチの 自愛と他愛の最もよき折合、イブセンの第三帝国を建設すべ 「愛は智の娘なり」と云う言葉は今の私を非常によろこばせ

頭が疲れて居る様ではあるけれ共私は快い。

漸 々「貧しき人々の群」を書き出せた。

生懸命に書けばよくなると云う信がある。

一月二十八日(金曜

「貧しき人々の群」第一を終った。

先に書いて置いた「農村」を失った事を非常に悔ゆる。どうしてもさがし出さなければ

ならないと云う願望を押える事は出来ない。

あれさえあればきっと楽になるとその事を思って仕様がない。

「いやーよ」と云って逃げて居ながら待って居る気があんまりはっきり分って不快になる。

今日学校で黒田さんが自分の嫁入姿を持って来て皆に見せて居る。見せてくれと云うと

傍のものもあんまりさわぐからいい気になるのだ。

人の人間でも動物でもないと云う様な気がして居る。 娘達のする芝居を非常に面白い様な浅ましい様な気持で見る。 私の愛すべきものは、 只

月二十九日 (土曜)

人達の目を思うとその前にお立ちなさる先生を見るに忍びないのでやめてかえる。 到とうとう 今日は同級会の日で千葉先生のお話だと云う。 々 見出した。非常に嬉 じい。 第二を終る。 私は伺って来たかったけれ共あの無智な 「農村」

どんな苦痛があっても『小さきもの』として出版する。 の教育論 に必要である。 すればそんなにせわしい思いはしずにすむ、書きたいものも書けるのである。 かな直 女子大学の入学試験は四月の七八日頃だと云う。 観の観念を持つと云う事は私共にも大切な事ではあるまいか。 に関しては幾分そうであった方がよいと思う事がある。 ルッソーの自然ニ帰ル説には同意出来ない節 余裕を与えられた様な気がする。そう 私の一歩のたしかなふ 々があるけれ共、 すべてを □□ み出 □自分のた 四 「エ 月頃には ミール」 しは実

一月三十日(日曜)

会う。 美音会に行く。 青柳と云う人は思ったよりいやでない様子の人であった。 可愛いと思った人は一人も居なかった。 青柳有美、 三つほどきいてじきに帰 岡田信一郎氏などに

沢山仕なければならない事があったにも介わらず何も出来なかった。

「貧しき人々の群」も出来なかったし、 さほどのものもよめなか **^**つた。

朝寝をした一日のはかどりの早いのが いやになる。

もう二月になるとそろそろ試験と云うものがやって来る、 たまらな

がな いのである。 来月から私は専心に書こう。 この一月を非常に複雑に送って私の実質となったものも亦少くないのである。 いのである。 精々 私は馬鹿である。 丹精して書きあげたら又どうにかしてもらえる事を信じて居るより仕様 三月にならないうちに 「鈍色の夢」も書けなければならな

月三十一日(月曜)

は寧ろ滑稽を感じる程である。 しき人々の群」第三を書く。ルッソーの女性観にはあれ丈自由平等を称えた人の説として 今月も終に終ったのである。 私は先ず日記をつけ通せそうな事を謝するのである。 「 貧

から抜けてよりつよく生きると云う事に進んだのをどれ位感激してよむかしれないのであ である。 けれ共ルッソー ニイチェがショペンハウエルの厭世哲学のすべてを死に安らぐ外はないと云う説 の主唱して居る自然に帰れの言葉は私にも今尚一つの教訓をしめすもの

る。 の償として死ぬ 「神よりも真理である」私には真の研究に日夜究々として居るのではないか。 のより尚生きる方が辛い事であり同情すべき事であると云う事を明 かに思 私は罪

実際おてんとうさまは生きる様にお作りなさったのである。

ったのである。

一月の感想

ある。 実に変化の多い一月であった。 私の改革期の来た事を切実に感じた月である。 私の周囲には種々の事が起っては消えて行って居るので 私は思想的に種々の変化をした。

私の愛人は真である。

に於ける不平を私はとり返さなければならないのである。 たろうか。この心は私に「貧しき人々の群」をかかせるのである。 私 の貧者に対して持って居た感じははたして真実な一点の虚栄心もなかったものであっ 「お久美さんと其周囲」

この一月は私の第十八年の最初の月として充実して居た。それ丈は自分でも信じられる

のである。

これよりも短かい二月は更に緊張して居なければならない。そして私のたてて居る予定

を着々とはかどらせて行かなければならないのである。 我心、 只専に努力めよ

〔一月中の重要なる出来事〕

十九日 「お久美さんと其周囲」脱稿

二十八日 「貧しき人々の群」起稿

二月一日(火曜)

母父上池田家晚餐、 何だか気が重くて少しも仕事が出来なかった。

夜文法を一寸見たなりたまらなくなって十時すぎに床に入った。

たまらない事である。 日記もつけず書きもせず、 僅ばかりニイチェの哲学を知ったばかりの一 日を顧みるのは

二月二日 (水曜)

英語ディクテーション

英男が四十度の熱を出したので家中ごった返して仕舞った。何も出来ない。 明日小此木

先生へ行かなければならないのに作文は出来ても居ず文法はさらってなしいやになって仕

舞う。

夜は四時まで暗い灯の下に起きて居た。

頭が疲れて来て居たので作文も思う様には出来なかった。 僅ばかりニイチェを読んだけ

れ共あんまり明かには分らなかった。

|時すぎて来ると妙に四辺が寒くなって羽根布団にくるまって居てもぞくぞくしたほど

二月三日(木曜)

である。

欠 席

十一時まで寝てしまった。学校には行かれない。 小此木先生も同様。

何だか頭が重いのでそわそわして何も出来ない。

頭を使うわりに私は食物を多くとりすぎる傾向か。少し考えなければならない。

夜は赤ちゃんが大変泣いて二時半まで掛ってしまった。

英男の熱が高い、皆心配して居る。

どうかして早くなおしたいものである。

本を読むでもなく一日ごたごたくらして仕舞う。

どこか馬鹿になった様で気が気でない。

「貧しき人々の群」も早く書きあげなければならないのになかなかそれどころではないの

二月四日 (金曜)

にこまる。

早退。教育試験。看護婦来る。

男さんはよくないらしい。 にして居らっしゃる。 風が大変強 い。 風邪がよくないので、 看護婦はクリスチャンで利口らしくはないが静かな人である。 松岡、 細井氏が来る。母上は非常に不安だと見えて涙ぐんだ様 喉が痛むやら鼻汁がつまるやらして気が重 ょ 英

□□れない。

る。 「貧しき人々の群」第四をかく。久し振りで安心してねられる。 胸をひやしたためであろうとの事だ。 先ず何より結構。 夜英男七度一分に熱が下

ニイチェの哲学を読み終ったが何だかすっかり捧げつくす所まで共鳴されない。 これ等

要な 分空白〕 の思想を元として私は私の哲学を産み出さなければならないのである。 如く我々には日に三四 の言葉は非常に面白 〔約二字分空白〕 , ; 同 人の書いた、 立方の新思想が必要である」と云う 愛した、 生きたと云う墓銘。 「汽車に石炭の必 約 四字

二月五日 (土曜)

欠席

徹底 と云う事は 返しに返して居る。 のである。 の痛くなる様な思い出に苦しめられた。自分自身に対して絶えず自分が不安を持って居る て仕舞って、 学校に演習会がある筈だけれ共行かれない。 した底力のある生活を出来得ない事をつくづく悲しく思ったり、 私に実につらい。 焦々しながら種々 日が曇って陰気なので、 自分の安心のために私は愛して居て呉れるものもふりすてた な事を考えて涙をこぼして居た。 私は到底堪えられないほど憂鬱な気持になっ 英男もあまりよくないので、 「生き抜こうとする努力」 思い出される毎に 家中はごった 胸

思い出を私は恐れる。 胸のかき乱される様な衝動的な悲しさを恐れるのである。

二月六日(日曜)

部屋に居られないので書く事の出来な で起きて居た。 非常に 働 1 た。 このいそがしい 朝から晩まで私は台所でせっせと働いて居たのである。 中で、 私は読み出したのである。 いの丈はいやである。 昨夜も五を書こうとして畳の 時間がまとまってなく、 夜は 四時近くま

の人間であらねばならない事をつくづく思ったのである。 私は自分が家のものの中心になって動いて居る事を思うと愉快である。 私は、 人間 の中

上に腹這いになったがどうしても書けなかった。

私は只文章が書けるではいけない。 飯のたき様も知り、 台所の世話も出来なければなら

ないのである。

二月七日(月曜)雪が少し積る

あの子の教育上どうかとこの事は疑問である。 「二月七日」を書く。 書いて居るうちに英男の事をどうかして書きたいと思って来たが、

若し相談して好い様だったら去年あたりの事から書いて見たいどうぞしてよいのが出来

る様に、

只記録として残す丈でもよいのである。

英男の名も出さずに書いたら大丈夫だろう。

英男の熱が一日下って居た嬉しい。 何かにつれて佐渡の金山と、 大島、 八丈島へ行き巣

狂人の心理を研究して書きたいものである。二重人格も面白いと思う。

鴨の気違い病院について見たく思う。

二月八日 (火曜)

英男が又少し工合が悪い家中の心配を集めて居る。

いそがしい一日を送って仕舞った。

二月九日(水曜)

英男少しよろし。

家中も少しずつくつろいで来た。

夜十時頃に床に入ってしまった。 今夜は、「貧しき人々の群」を書きたいと思ったのだけれ共頭が疲れて居て出来ない。

二月十日(木曜)

〔書信〕安藤千枝子

激し 母上に相談して許しを得た。 い風が吹く、 「鈍色の夢」を書いたら英男の事を一つ書きたいと思う。 夜は珍らしく筆が進んで十九枚書く。

をしたって居た若い子供の事を思い出す。 る頃を書いて見たいと思って居る。 お久美さんと其周囲」で得た失望をとり返さなければならないのである。どうしても。 四)を大抵なおし 時頃まで起きて居たのだが不思議な興奮が私のすべてを領した。グースベリー (五)を書く、 四十幾枚かになって居る。 一つの可愛いい小さいエピソードであろう。 「徳馬鹿」 の事も思い出した。 百枚はじきである。 あ 私は Ò の熟れ 東京

二月十一日(金曜)

るものかと思って仕舞う。 「お久美さんと其周囲」はもう駄目である。 道っちゃんと二時頃まで話し合った。先の頃の思い出が私の心を非常にやわらげて涙ぐ 紙とインクと時間の無駄であった等とさえ思うのであった。 彼那下らない一貫しないものを書いてどうなぁゟゟ

まれるのであった。あの松原の中 の花が一杯咲いて居ましたっけね。 -に百合が咲いて居ましたっけね、 あの湿地に好い香

y heart leaped up when I thought my young day's dreams. お月様がようございました。I remember, I remember that night, that moon-light and……. M

二月十二日 (土曜)

明日午後一―三時千葉先生へ

ida (nurse for Hideo) was returned to her home, but she would not do so, and submitted to my moth e sunshine was bright. I heard a very sorrowful news, that Miss Rikiko Suzuki was die at the 10th. er. At night I wrote my 6th part. How I was surprised with this news! My mother went to visit for her unhappiness. This evening Ish It was very cold today. At the morning the wind blew hardly but at the afternoon it settled, and th

二月十三日(日曜)

It was fine to-day but colder than yesterday. In the afternoon my mother must go to temple for M

iss Suzuki, so I could not go to Chiba. At night Mr. Takamatsu comes, and told many tales about M very lovely and same his wife.ҳ r. Furuhashi, and I said to him: "I can not love him, for I know his bad nature and matters. It was al l my old day's dreames, and I do not like remember it and I forget all of them. $_{ imes}$ *Young father is

二月十四日 (月曜)

地理試験、千葉先生出席、女子大学入学の事

を甫守に話す。

〔読書〕「我生活より十六講」

いらっしゃって、入口の所でお目にかかる。 千葉先生がズーッと欠席していらっしゃった事を知ってびっくりした。でも今日は出て 昨日は上らないで却ってよかった。

又近い内にいらっしゃいと云って下さる。 夜は書かずに明晩の分までよむ。イブセンの

れには同意しかねるのである。 第三帝国の所で、キアルケガアルドが真理は主観であると云う事を云って居たとあるがそ

若し主観が真理であるとすれば万人に真理は万変なものであるべきであると云う事を許

さなければならない。 「無か しからずんばすべて」と云った言葉には動かされる。

帝国に於てイブセンも亦超人を持ったのではないか。

ものである。生きぬく! 動きぬく! 生きんとする努力、 人間として苦悩と歓喜を深く味ったものは得がたい心意の動を持つ 書きぬく!

二月十五日(火曜)

am very tired to keep her care This morning I got up too late, because last night my youngest sister did not sleep till past 1. So I

t I missed. At night I wrote my Vth. 10p. At school in English lesson, we turned words into Japanese, and heard and wrote one sentence bu

二月十六日(水曜)

It was extremely cold today.

Decameron and recieved some spiteful thoughts. Every man, and every word was filled with such s At school I met Miss Okonogi and promised next week I would ask her times. At night I read the

pites and such sorrows. I am sorry I have not hour to write my Vth.

二月十七日(木曜)

To-day I heard English teacher Miss Boide's father died and she could not come to-day.

my 7th. corrected the Vth and it became 15p, and I think it better than. maid of Takashima because I must write the matter of my youngest brother Hideo. At night I wrote I am very sorry for her. I think of my sorrow that will come sometimes next. I read the children's

二月十八日(金曜)

d has two sides. So〔約-語不明〕fact only seems a sad side with tears, and many of people seem ometimes. If I could be a brave woman I must full heavy sorrow and bright joy more than anyone. a thoughtless side to forget a dark sides. And so I am very melancholy sometimes and very joyful s I thought many things about our life, birth, death, sadness and laugh, light and dark. All my worl

二月十九日 (土曜)

Very bright day. The brilliant sunshine is in flames upon our heads.

It was examination of music.

二月二十日 (日曜)

g her cold heart and unkind thought. I do not love and do not beleive her. Our world is not near her. ito no mure, and learnd the Kika. She told many stories about Miss Takamine, and said with doin s very very glad of his gifts. In the afternoon I went to Sakamoto, to read her my "Mazushiki hitob When I thought it I felt delight to myself. It was very warm day, and my father went to Yokohama, and got some beautiful things, so he wa

二月二十一日(月曜)

e our world was covered with It was very cold and at night the snow came from the heaven. In silence, stillness and bright whit

rt was filled with a wonderful memory, sad, delight, light, dark, I could not say but some of them m How I felt sorrow that I couldn't write my 8th! Realy I have no time to settle my thought. My hea

ade me heavy

二月二十二日(火曜

がすむと、あとは少しは暇になるだろうからさっさと書かないと仕様がな ほめたと話して呉れる。それにしてもよく書きたいと思わないでは居られない。 英男の Dictation があった。好く出来た。坂本さんが、 五寸程雪が積った。 めずらしい様子だったけれ共、そう大して美しかったとも思わない。 私の「貧しき人々の群」 を従弟が 明日 歴史

私の見たあの生々しい松の切り株と□□の先生のおじぎを書く筈である。 であってもよさそうなものであると思う。八には、 文法と作文を書いて小此木先生に都合を御伺いしなければならない。 明日学校の帰りに図書によらずに来て夕方までに千葉先生のを幾分なりとも書き、 国分の豆腐の子と気狂いと、 今週の二晩位は 首吊りと ひま 夜は

二月二十三日(水曜)

ntence

It rains to-night. I wrote my 8th with sorrow and gladness. Among this month I must write this se

私は、 「小さき憂悶者」として小学校の五六年時代の事を書こうかと思い立った。

二月中に「貧しき人々の群れ」を書きあげなければ 「鈍色の夢」を書いて居る暇がない

であろう。

文典をもしらべなければならないかと思うと、 たまらなくなる。

けれ共私はだまってこつこつやる丈の事だ。

二月二十四日 (木曜)

「貧しき人々の群」の八をなおす。 「追憶」もなおしたいしするので私は非常にせわしい

思をして居る。何だか落つかなくて、こまる。

明日の昼と朝は少し早く行って文法をさらって置かなければならない。

もう明日が二十五日だと思うと気が気でなくなる。

母上も非常に気のりがして居られるので幸福に感じないわけには行かない。

二月二十五日(金曜

小此木先生へ行く。 [™]Tanglewood tales sy Hawthorne S The Dragon's teeth.

になる。

原稿紙が二十二銭になったと云う事は実に私にとっては大打撃である。 本と原稿紙の代

一円十六銭をいただく。

を書いたら一杯になってしまった。 明日は千葉先生のへかき、夜から夕方は創作を進めなければならない。 何だかつかれて居て何をするのもいやだ。 夜は学校の手紙

二月二十六日(土曜)

『Tanglwood tales』を買った。

原稿紙三百枚

ペン 五銭

二月二十七日(日曜)

漢文

英語にかかってしまった。

二月二十八日 (月曜)

夜は非常に興奮して沢山書く事が出来た。

小此木先生へ行く。Tanglewood tales を訳して見ようかなんとも思って見る。

Dragon's teeth は大抵よんでしまった。

二月二十九日(火曜)

南風で大暴風雨であった。十二時半まで寝てしまう。

「貧しき人々の群」を書く、 十二まで、百三十一枚になった。 来月の始めには出来る予定

である。

〔二月の感想〕

短い月ではあったけれ共私としてはかなり有効に送れた事を感謝するのである。

の芽を持って居るかを感じてやまないのである。 「貧しき人々の群」を書きながら、実に私は人々の愛すべき事、彼等が如何に尊むべき心

私はニイチェの哲学に非常に動かされて居る事を自白する。それは私に嬉しい事である

と共に、一種の恐怖である。

足元の強い一日を送る事はやがて、 輝きのある一生を送る事であるべきである。

愛すべき我よ、尊むべき数多なる人々の群よ。

私はどんなに芽ぐむこの春を歓び迎る事であろう。

[二月中の重要なる出来事]

二日 英男今日より発病重症インフルエンザにかかる。

三月一日(水曜)

夜下島さんが来る、 あの年をして貧しい淋しい様子をして居るのを見ると同情しずには

居られなくなる。

云う事を感じてしまった。 んじて居られるのを思うと実際内的事件はその人がまねかなければ必ず起るものでないと 書斎で種々話しをする。あの人の天地の如何に可愛らしい事よである。 あれ丈の中に甘

「貧しき人々の群」と「農村」を出して見る。まるで比較にならない。彼那ものをとくと

くとして書いて居たのかと思うとなさけなくなる。

二月が英男のためにごちゃごちゃになった事を惜しくも思うが、 三月を有効に用えばよ

いとも思われる。

三月二日 (木曜)

「貧しき人々」十三を書く。明日海辺へ旅行だけれ共金曜で海がこわいから行かない事に

して十四と十五を書けたら書きたいことである。

今月中はどんなにいそがしい思いをしても「追憶」とこれと「小さき憂悶者」をまとめ

なければならない。

られない。 そして四月の十日頃にはどうしても出さなければならないのを思うとゆっくりはして居 「お久美さん」を残念に思わない訳には行かないがそれに刺戟されたのを思え

ば有難い。

三月三日 (金曜)

欠席

国民美術協会の展覧会へ行く。

して居ていかにも疲労して居るらしい様子であった。 てもなくってもよい様にさほど心も引かれなかった。 でよく見て居られない。三越へ廻り、 T女史の肖像、パンドラ、が彫刻では目立ってよかった。 石井柏亭さんの 扇面はりまぜの屛風と、 半襟と、 青楓さんの二折屛風が図案としてはよか 白粉入を買う。 道っちゃんに会った。 光風会の方などをいそいだの 半襟の特別陳列などはあ 青ざめた顔を つた。

三月四日 (土曜)

大変寒い風の吹く日であった。

で少し安心になった。 夜は疲れて居たので何にも書けなかった。 本田 の道っちゃんが来ておはじきをして遊ぶ。 午後中掛って千葉先生のを書いてしまったの

○小雨する春の夜なれば何となく 何となし子供の時分が思い出される様で淡い気持になった。

静かなる心おはじきをする。

○音もなく降りしきりたる春雨に

土の肥ぞ美くしからん。

夜なれば春の夜なれば何事も

只うるほひて我目にぞ見ゆなる。

静かな夜が――静かな夜が

音もなく迫り来る。

柔かき香をたてゝ・・・・・

春の夜なるかな。

三月五日 (日曜)

作文の文字と云う題に対してあまりよくない文を書いたし算術も二つ違ったからあやしい お茶の水の入学試験があったので春江ちゃんのために朝早くから、三時頃まで行った。

ものである。

西尾先生(小学校の)に会った。

種々昔の話が出てあの先生も年も取った事をつくづく感じてしまった。私が十八になっ

48

たのは決して無理ではない。

夜は三四人の食事客

かなりいそがしい思いをして、

一日少しばかりの本を見ただけで過ぎてしまった。

三月六日

(月曜)

千葉先生のを出した。 夜十四をかきかけて右の目の工合が悪いし疲れたりして終りまで

出来なかった。

に発行してもよい。又そうでなければ出来ないだろう。 どうしても三月の十日までに出来して仕舞わなければ、 間に合わない。 四月の十五六日

ほんとに日が短かいにはやり切れない。

どうぞして、よく出来上ります様に。

若しこれが悪かったら実に私は失望して仕舞うであろう。

三月七日(火曜)

欠

春が如何に私にとって毒悪いものであるかと云う事を感じ始めた。

私 [の精: 神は或る圧迫に堪えられない様になって来て居る。

すべての平衡が破れた様で頭の工合が大変悪い。

早退をして帰ってから働いた方がよかろうと部屋を片づける。

夜十四を書きあげ十五の少しまで進む。

妙に過敏になって昨夜うなされてばかり居たのですっかり疲れてしまったのである。

三月八日 (水曜)

欠

お送りに行く。 父上から電報が度々来たのでとうとう英男をつれて七時の汽車で京都へ出発なさった。 途中雑誌を買い新橋の博品館で手袋を買って行ってあげる。

午後から行くつもりであったのにとうとう欠席してしまった。

るのだと思うとたまらなく嬉しい気持になった。小此木先生のが出来ないので気が気でな 明 金曜に行くのを止め様か等と思って見る。 「日からは是非行く。 夜数学をさらいながらこの恐ろしい学課とももう一二週間 主婦の居ない家は妙にがらんとして底淋し で別れ

いものである。火事だの泥棒だのに過敏になる。

三月九日 (木曜)

夜は英語と、 絵の下絵のさがしとで大抵つぶれてしまった。

この頃はいそがしくて実にこまる。来週中はせわしいであろう。

自分の書いて居るもののことなどを思うと妙に感情的になって、祈りたい様な気持にな ねる前にコーヒーを飲んだので少し興奮して床に入ってから目がさえてこまった。

ってしまった。

手を胸に組んでしずかにして居る内にねてしまった。

幾何試験があったが、こまりもしなかった。

三月十日 (金曜)

英男へ葉書をかく。

ぐ何とかかんとか変な目をして見るものの顔を見るとおだやかな感じなどはどうしても持 頭 の裡が不透明でイライラしてたまらなかった。 絵なんか少し風の変ったのを書くとす

てない様な気持になって来る。 陰鬱になって淋しくて仕様がなかった。

くなってしまった。 夜英語を少しさらうとじきおそくなってしまった。 月曜に小此木先生は随分辛いけれ共しかたがない。 謝辞がなか なかかけな いでたまらな

三月十一日 (土曜)

雪が降った。 春になったと云う事などは思われない程すべての様子が荒々しくなって吹

体操の試験があった。来週中せわしい思いをしなければならない事を思うといや

雪と呼んでよい程ひどい有様であった。

音楽、

を になる。 わない方がよいのである。 のである」と云う事を仰っしゃった。 自殺者を救け様とする事はよいことかもしれないけれ共実際に於て生存に堪えないもの。たす 度一時的に救助したからと云って終生の幸福を計ってやることは出来ないのだから救 国語の時、 「適当な自殺が許されない限り生きなければならないために□をする 適当な自殺を許されない限りは 実にそうである。

三月十二日 (日曜)

八時三十分英男お父母様御帰り、 間宮、 本田、 自分迎に行く。

っちゃ場のわきの狭い道で多勢の貧民にとりまかれて巡査に電話をかけさせて居る自分等 帰りには自動車で来たけれ共自分自身の恥かしめから逃れる事も出来なかった。 あのや

あると思う。 ならない。 病にばかり限られて居た様であるがそれは貧者の繁殖と云う事にも考え及ぼされることで く見て居る。エレンケイの、子は親を選ぶ権利があると云う言葉は今まで、人種改良で疾 を見てくれ。 自制と、自己を偽ることを話し合う。本田の道ちゃんは、 同情と、 あわれみは区別されるものであると云う事をよく考えて見なければ 自分を詐る事と自制とを等し

三月十三日(月曜)

はっきりしない天気で困ってしまった。小此木先生へ行く。

修身と家事の試験。

修身はかなりよく書けたけれ共家事は滅茶滅茶であった。

何だか頭の工合が悪くて困ってしまう。

三月十四日(火曜)

教育の試験 「人生観を問う」と云う問題に興奮してしまって手が震える様であった。

いよいよ頭の工合が悪い。

春の妙にムカムカした天気と、 衝動的な空気が頭の平静を破って実に苦し い気持がする。

家計簿記がベリーグードなのは滑稽。

三月中にどうしても「貧しき人々の群」 を書きあげてしまわなければならないのである。

四月中には出版しなければならない。

今日は学校へ行くまいと思う。夜、父上 『建築世界』 への原稿訂正。

三月十五日 (水曜)

欠

三月十六日(木曜)

三月十七日(金曜)

早退

国語試験。

千葉先生の教育の答案が返って来る。

人生観と感想に実に嬉しい評をして下さった。

「これ丈の反響を生じ得る素質を備った方に私が此の学科をお話しする事の出来た機会に

私は心から感謝しました。」

発達させたいものである、と云うのが私がこれを見終っての感じです。 真剣な態度で、 貴女の歩んで行かれる人生を何時までも理解して行ける様に、 私自身も

君が行く路は一すぢ ひとすぢを

行かるゝかぎりゆけよとぞ思ふ

と云う尾上柴舟先生の御歌を以て前途を祝福致します。

欠

三月十八日 (土曜)

欠

とうとう「貧しき人々の群」脱稿二百二十一枚。 私は最後の一節を泣きながら書いた。

如何に深い喜びと悲しみが私の心を領した事であろう。

厚く重なった結果を見ながら一月の努力の結果を深く感謝したのである。

がわしい。 夜の一時半風呂に入りながらどの位私は泣いた事であろう。

今までのどれよりもよく出来た事は信じるけれ共はたしてよいかどうかと云う事はうた

三月十九日(日曜)

私は喜びと不安にせめられて居なければならなかった。

坪内先生の御帰京をきいたが分らないと云う。

どうかして早く見ていただきたい。

どうかして出版したい。

種々の希望と気味悪さがまじって一杯になる。

一日字句の訂正でつぶして仕舞う。

三月二十日(月曜

独歩の『運命』をかりて来る。

今日で学校もおしまいになった。

境先生の御話には涙がこぼれそうになった。

夜六時半頃から坂本さんの所へ稿を持ってたずねて行った。

行きがけに屋並みの黒いかげから大きな月が上りかけて居るのを見た。

大変に気持がよ

かった。 終りの方をきいてもらう。苦しい位によいと云われたけれ共、 只嬉しい丈ではな

\ `°

帰りに九時すぎ好い月を浴びながら帰った。

と云い一人が「ほんとに早くしんじゃえば好いあのおもちゃ皆ぼくのにしてやる」と云っ 佐藤さんの子供が「お父さん死んじゃえばいいそんなもの皆夜店にたたき売っちゃう」

たと云う。一つの暗示を得た。劇にして見ようかとも思う。

三月二十一日(火曜)

独歩の運命説がよく分った。

彼の時代の文芸家の中で彼が如何に苦悩多く苦しかったかと云う事を思いやる。

「空知川の岸辺」は、巧な叙事と旅情の表れである。

夜女子大学の願書を書く。

三月二十二日(水曜)

女子大学願書呈出

銀行へ行き。夜弘道会の名人会へ行く。

永田錦心の薩摩琵琶はよかった。

低い声 義太夫の綾花の語り口は呂昇などから見ると如何にも下びて居る。 の時は声楽にきく丸味と落つきがあってよかったが甲声が悪い。

筑前琵琶はあまり繊細な女性的なものすぎる。

伊十郎 旋律の三味線的な、 の声はいつもよい。 精神のない声がまことに気味が悪い。

倉知の連中に会って、食堂に行った。

三月二十三日(木曜)

送別会へは行かなかった。 「知慧と運命」 と、 上杉博士の 「国家論」 を少し見る。

あまり感服は出来ない。

進化論の適者存続の論などに対する反対がかなり単純なものである。 種々の疑問が起っ

た。

人道主義は今の有様では空想であると云うのは感心出来ない。

夜、文法とリーダーをすっかりよんでだけ仕舞った。

「貧しき人々の群」少し訂正。

坪内先生のはつまりお帰りまで待つと云う事になったのである。

三月二十四日(金曜)

上杉博士の憲法を少し見る。

どうも合点が行かない。

氏は進化論で国家は、 適者として生存せんとする必要上から最もそうするに都合のよい

国家と云う形式をとったのだと云うが、そうではなくて、 から適者として生存せんとする本能のさせる所であると云ってよいのである。 であると云うのであるが、 凡そ本質があると云えば何か必要があって本質が起るのである 国家をなすべき本質を有するの

権力は優越なる意思の力なり

志を我々は優越な意志と云うのか?

と云う事があるが、 単純に権力は優越な意志の力と云う事は出来ないのである。 下劣な意

三月二十五日(土曜

朝花屋へ行って花を買って来て写生する。

な かなかよく出来ないで困って居ると銀地へ図案の様に置くがいいと云うのでそうする

つもりで玉川堂に緑青と銀を買いに行く。

銀、金は須田町の箔屋で買った。

夜おそくまでかかって書いたがよく出来ない。

夜は妙に陰鬱な気持になってしまった。 あまり単調で立派でもなければ美術的でもないのを見るといやになってしまった。

三月二十六日(日曜

午後一時から練習があると云うから行く。

后陛下の御歌のうつしと御親署勅語を拝覧、 支那留学生に対して侮蔑的な様々な微笑の加えられるのを見ると汗が出る様だ。 貴族的な好い御字であった。 御色紙 のすりも 故皇太

のを分けてもらったがつまり持ちにつくものだ。

真水に会う。 夜美音会へ行く。小島氏に会う。 醜悪な人達だ。 昨日神保町の停留場で腹がたつまで私を見て居た人が保育 妙に私のどうしてもすきになれない態度を持って居る。

会の会員だとかで挨拶をする。

帰りの電車に或る病的な欲情に支配されて居る男を見た。

三月二十七日(月曜)

ばかりであったが高嶺さんのピアノはいつもよりもよかった。 ともにあきが来て下らない事になってしまう。 卒業式、 証書を持つと流石に好い心持になる。 帰りがけに同級会があった。 感謝の言葉や何かを余り繰返すので両方 何だかけったるくなって夜 例の通 り音楽

は早く寝てしまう。

「爛」を読んだが私には批評出来ない。

彼あ云う生活に入って居る女の心持なんかもよくは分って居ないのだから……。 千葉先

生がお目出とうと云って下さったのはうれしかった。

三月二十八日(火曜)

作楽会へ行く。 所 謂 婦人連に会ったが何だかこそばゆい様な気持にばかりなって来た。さくら

説教節を聞く。 筑前琵琶と義太夫をまぜた様なものであまりよくはないけれ共少しは面白

かった。

三曲合奏で胡弓を引いた婆さんの超然とした姿がよかった。

夜文法を二六頁さらう。

日を数えて見ると実にぐずぐずしては居られないのである。

久し振りで部屋に落付いて見ると気持がまことによかったけれ共何だか身内がムズムズ

する様でたまらなかった。

会のときくじを引いて伊藤先生のところへ安藤さんと行く事になった。

三月二十九日(水曜)

関根先生千葉先生へ行く。御留守、帰りに文房堂に万年筆を持って行って見せたがとう

てい悪くする丈だと云うので原稿紙とインクを買って帰る。

左の鬢の所がだブだブして居るのがきになってたまらなかった。

夜は文法、 習字、もう明日三十日だと五日外ない。 大瀧から丸善の五円切符をもらう。

実際懸命にやらなけりゃあならない。

明日三越へ行くのだそうだけれ共実に考えものだ。

一日つぶさせてはやり切れぬとも思う。

家督相続のことで書きたい事があるが当分は駄目だろう。

三月三十日(木曜)

大瀧に行く。

いつもと同じ感じを得てかえる。

非常に平和な夜の中を車で走ってかえる気持はよかった。

沢山の輝きが色々な色にまたたいて居るのが子供らしいよろこびを与えた。 水道橋の通りから見ると春日町からズーット掃除町のあたりに一かたまりになって灯の

ませて何だか可愛気がうすくなった様に思える。 った。行きに中村屋によったら黒光女史らしい白い丸顔の目のきれいな人が居た。 春と云ってもどことなく薄ら寒いので風を切って運ばれて行くとたまらなく気持がよか 広子が

[三月の感想]

三月が過ぎて仕舞った。

私は 如何程の感じを持ってこの一句を書く事であろう。日が暖く頸元をてらす様になっ

た。

花が咲き出した。

けれ共この一月の間にどれ程のものが出来たかと云う事はその事を考えた丈で苦しくな

る。

けれ共「貧しき人々の群」を出来した事だけはよろこべる。 精神上肉体上に春の圧迫が

強くて堪らない様である。 頭の中が始終とがとがして居る様でいやである。

早く秋がまたれる。

けれ共秋が来ると又一つ年をとるのが近いと思うのもいやである。二十になるまでに少

しの事はして置かれなければたまらない。

まだ三年の先がある事はうれしい。 春は御身の能う限り美しくあれ。

〔三月中の重要なる出来事〕

八日 英男母上京都出発

十二日 父上母上英男帰京 (英男にとりては最初の旅行なりき)

十八日 「貧しき人々の群」脱稿

二十二日 女子大学願書呈出

二十七日 卒業式同級会二十六日 御親署勅語拝覧

二十八日 第一回作楽会 女子大学に証書を見せる。二十七日 卒業式同級会

二十九日 大瀧より祝として丸善の五円切符をもらう。

四月一日(土曜)

四日午前八時ヨリ試験

雨が降って居る。静かな好い日であった。

丸善に本を買いに行った。

『後に来るものに』、

トイェフスキー著『叔父の夢』、 『貧民心理の研究』 を買って来る。

『人及芸術家としてのトルストイ並にドストイェフスキー』、

ドス

夜はそれ等を大抵一通り目を透した。 「叔父の夢」 の中には又愛すべき沢山の人が居る。

「後に来る者に」は彼の人の如何にも純な心持のいい説である。

よく読んだら多くの教訓

と悦びを得る事と思う。

「貧民心理の研究」で、 夜は妙にメランコリーになってやたらに涙をこぼしたくて仕様がなかった。 「貧しき人々の群」の心理に大した誤りのない事をうれしく思っ

四月二日 (日曜)

午後から小此木先生の所へ行く。

を作らせて行く。六時すぎまで種々な御話しをして帰る。 三丁目で花を買って行く積りだったが切らなかったので大曲りまで行って六十銭で花束 もう太陽の面と向った光りには

堪えられない様になって来た。

千葉先生と堺先生の御話をして来る。 「貧しき人々の群」を見ていただきたいと云って

来た。

本田の道っちゃんと直之さんが来る。

御父様御母様浅草、 午前中さらった丈で夜は英語なんかちっとも見とれなかった。

四月三日 (月曜)

何と云っても気が引きしまる。

私の新らしい生活の始まるのである事を思うと

よしそれがやさしいものであっても馬

鹿にすべきではない事を思う。

四月四日(火曜)

入学試験 Conversation と英文和訳と Dictation があった。

割合にやさしいなと思った。

同じ日の午後に発表、女学校に入った時ほどうれしくはなかった。 ひどい風が吹いてた

まらない。夜は早くねる。

お父様山形御出発。

非常に混乱した心持であった。

四月八日 (土曜)

午前学校へ帯どめをとりに行く。 何と云う図案なのかとあきれてしまった。

千葉先生に御目にかかって来る。 日曜の午後は居るとおっしゃった。

来た。坂本さんがラセラスの訳を拝借して来たと云う。 「おめでとう」と後から声をかけて下さったとき何とも云われないうれしさがこみあげて

帰りに芝へ行く。お婆さまが一人でぽつねんとして居らっしゃるのを見たら可愛そうに

なってしまった。

お祝に十円いただいた。

四月九日(日曜)

堺先生の所へ花を持って行く。

高嶺さんが留守だったので先生に丈御目に掛って来る。

が安っぽい。 好いものがあったけれ共マッツや何かがよくないので下品な感じを与えた。 自分の家の食堂は好いなあと思わない訳には行かなかった。

堺先生は可愛いと思った。

「後に来るもの」それは好い感化を与える。 純一な心持が又心に戻って来る様に感じられ

た。

「自分を最も自分の望む人間に仕立てて見せる」と云い得るものが幾人かあろう。 私もそ

の一人であろう事をのぞむ。

四月十日(月曜)

九時から宣誓式があった。

校長の演説は詠歎的のものであった。 けれ共自我が如何に尊ばれて居るかと思うことは

うれしかった。

署名の上に何か句を書かなければならない事になったので、 求めよ然らば与えられんと

書く。私は私の周囲にどの位失望仕様として居るか。

私は私一人の道を進むばかりである。

私 千住さんと云う人がざらざらして居ていやになる。 のほんとを理解し私のほんとを愛してくれる人は居ないであろう。 私の道は一人で進

むべきである。

四月十一日(火曜)

学校授業な し。 午前中行って午後から本屋へかいに行った。

『ニイチェの研究』、 泥濘」を少し読む。 偉大と云おうより寧ろ私をおそれさせる。 『我等何をなすべきか』、 『社会力』、 『結婚の幸福 泥濘』

そして私の持論の裏書きをさせられる様に感じた。実際性慾からはなれて、 醒 め切った

心持で、 って居る姿は何と云う浅間しい胸を悪くさせるものであるか。 或る形式の許に結ばせられた二箇の二人が互にとけがたい敵意を持って向かい合

のは事実である。 「二人きりの時をねがうよりも却って第三者のあった方がどことなしくつろげる」と云う 痛ましい事実であ

世の中の所謂幸福なる幾多の夫婦者よ。

四月十二日(水曜)

帰りに千葉先生に門のところで御目にかかって御一緒にかえる。

感じられたかと云うことも御話した。一つ一つ丁寧にきいて下さった。 この間から申し上げたいと思って居た反省録のことなど又は生徒気質がこんなに浅間しく 「生長老成死」と云うのを読めと云って下さる。 種々な御話しをしながらあの坂を下りた。

いつもの様に紫っぽいお羽織を召していらっしった。

んだ。 てしまった。 夜それもまだ夕方妙にメランコリーな心持になって、 夕闇に浮いて見えるこぶしの伸やかなうす赤い花を見て妙に涙ぐましい心持になっ 自分は何と云っても若い。 私は彼の中の人物にどの位感動させられた事であ トルストイの 「結婚の幸福」を読

ろう。

に打たれる。

四月十三日(木曜)

故あの男を拘引するのか」 言葉には深い意味がある。 べきか」をほんの少し見る。 で学校仕 貧しき人々」の中に非常に足らなく思われる所が出来た。 江 戸川 辺が 舞い本を買いに廻ろうと思ったが風が吹くのでやめてかえる。 すっかり咲きそろった。 学校がいそがしくて自分の本もろくによめないのはつらい。 「そうさせるのだから官憲で要求して居るのでしょう」と云う 只の一句さえも私を深く考えさせる調子を持って居る。 灰色の空の低く下った薄墨の様な日である。 「我等は何をなす 午前中 何

四月十四日(金曜)

ある。 ら仕ない方がましだいやになる。 帰 りに音楽の練習だと云うので出かける。 菊子さんの噂さなどをする。 小寺さんはやっぱり何と云ってもどこか違ったところが つまらない。 あんな殺風景な椅子でする位な

をしたわ 夜は 雨になる。 しく思わせる役にたつだけである。 岸本先生の発音の教授は一 番熱があって面白い。国文の教師は只堺先生 桜がここいら中に咲く、 桜だらけと云う感じ

に丁 五. 度雪のつもった日の様な感じを部分的ながら感じた。 時頃になると桜楓会の建物が灰色に澱んでその前にかたまって居る白 今夜の分では明日は学校へ行く い花の群 のため

四月十五日 土 曜

出し d Destiny と Longfellow's Poem works ヲ買イ、 るのだろう。 男の子に会った。 の講義を買い文房堂からノートと鉛筆を買って来る。 又尊く思われた。 雨が降 た桃色の封筒を笑ってつき戻されたときの心持がいつまでもあの子の胸を ル、 夜 学校欠席、 「我等なにをなすべきか」を少しよむ。 きまりの悪そうな目つきをして通って行った。 十二時までねる。 午後から本を買いに出かけ中西屋で Wisdom an 三省堂で The story of the world と「徒然草」 昨日のかえりにあの何とか云う若 私共のもちたい心を持った偉人が あの道のかどでせっかく いためて居

匹 月十六日 (日曜

午前中 「我等何をなすべき乎」を読む。 心を動かされる事々が沢山見出された。 私の母

萩野 の持 る うかと云う事がうたがわれた。 んだ態度を見たら自分が、 同じ様な事を云って居た。 のを見出し って居る道義的理想ト彼の理想と云おうより寧ろ断定して居る思想に一 三好、 飯田、 て少しありが 小島、 真水、 たか よみ書きをして居るときにあれほどの集中が行 教授のブァイオリン独奏は非常によかった。 夜は久し振りで自分の部屋に落ついて勉強する。 つ そが、 た。 午後上野のコンサルトに行く。 千住その他のだれだれに会う。 坂 皆同 本、 あ わ 0) 致 じ様なご 矢作、 ħ 真 心た所 剣 7 居 打ちこ るかど 顔をし、 おとき、 のあ

四月十七日(月曜)

いさわぎで暮して居るのを見る事は辛い。 成 瀬 氏欠席、 五. 時すぎまで学校に居た。 私共の周囲が余り単純らし い いかにも子供らし

私は此処でも私の要求する友達を得る事は出来ない。

あ は永久に少くとも 位不具な状態で忘我の快楽を得られるものとすれば人間もかなり単純である。 の殺風景な堤の泥水の中をぼろ舟で漕いで廻って居るのを見たら変な気持が 友達に於て私は失望したけれ共学校そのものに於ては何のがっかりも見出し得ない。 四年の間はそうであろう事をのぞむのである。 江戸 \prod の花見だと云って した。 木曜から授 あ Ò 私

業がないだろうと云う話が出た。

四月十八日(火曜

級会が 天気が ある、 あんまりはっきりしなかった。 皆同じ様な気持になって同じ様な事を繰返して居た。 種々な気持にならされた。

私は になった。 けよった自分の心を私は祝福する。 すると例の顔をしながら私の髪の事を云い出した。 こびであった。 って居なければならない人の心は憐むべきものである。 研究掛になる、 子供だなあと思わないわけには行かなかった。 かえりに安達に会う。 メーテルリンクやトルストイでもせっせとつぎ込んでやりたい様な気持 後姿を見るとフト声をかけたい心持になってあ 私はまだ愛すべきあまたを持って居ると思うのはよろ その時どの位私は妙な あの様な他人の髪にまで一 何か 一言云いたい心持になってか 5心持が 々気をつか いさつを たか。

四月十九日(水曜)

授業なし、 明日の記念日だと云うのでいそがしい目に会った。 様に感じながら床に入った。

ら傍によって、 ると浅薄さに反感を持ってしまった。 して沈黙な重々しい人間でありたいと云う感望がしきりに起った。 単純に 人から軽く見られる人間でありたくないと云う心持がしきりにされる。 午後から四時頃までの間に千住が何か宗教の事を話して居たがだまってそれをきいて居 あれを感心して聞いて居られる内は人間も幸福である。 Faerie queen を子供のために抜書いたものを読んで居た。 種の自己広告だと思うときく気もしなかった。 私は軽い侮蔑を感じなが ほんとにどうか

四月二十日(木曜)

情夫となって馬鹿にされつつへばりついて居る人間的の苦悩に伴う悲劇的 の許され 対照となる男性も同様である。 ると同様 夜三時頃まで「処女地」を読む、どの位涙をこぼしたか知れない。 ない所であろう。 の感激と愛を感じる、 私は感心した。立派だと思った、 生活の河は如何にもクープリンである。 「その前夜」の女も「処女地」の女も同様 そして涙をこぼして目が廻る 「その前夜」で受け あ の宿屋 の滑稽は の点を持ちその の 主婦 他 0) 0)

つしやった。

四月二十一日(金曜)

共あの人の傑作ではないらしい。ダヌンチオの話が出た。只参考によむ丈だと云っていら 小此木先生 $\overline{\ }$ 四時から行く。 メーテルリンクの Three Plays を読み出す。 面白 けれ

が思う様に心を表わしてくれない。 書かずには居られないと思わずには居られなかった。二日程不規則に生活して来たから今 非常に電気の光線で美くしく見えた。 夜は早くねて明朝早く起きた方が利益があると思ってねる。 夜は部屋を整理。 「小さき憂悶者」を書き出す。少し長い事何も書かないで居たので筆 恐ろしい気がした。これからどんなにせわしなくても 買って来た真紅のアネモネが

四月二十二日(土曜

夜、浅草へ行く。活動を見る。

浅草的なすべての刺戟を受けた。

四月二十四日(月曜)

欠席西村祖母君来訪、 非常に暑くてだるいのでろくに仕事も出来なかった。

四月二十五日(火曜)

級会がある。 皆同じ様なことを云い思いして居るのかと思うといやになってしまった。

校長に書いたものを出す。

四月二十七日(木曜)

学校の帰りにお茶の水に行く。どの位久し振りで心に種々の想像をして行ったかしれな

いのに行けば又失望してしまった。

千葉先生にも御目にかからなかった。

私の卒業の写真がマクベス夫人の様だ等と蜷川さんと話をする。

どこに行ってもつまりは失望しなければならないのかと思うといやになってしまった。

お茶の水の橋のところにたって学校帰りに御目にかかったとき御話したことを又話してき

かせる。

どうしても割合によみかきが出来ないので否になる。

大変楓の新緑が美くしい。

四月二十八日(金曜

父上御帰京 夜松円氏来訪

が思われて書くのなんかあんまり恥かしい様にもなって来た。 ょ 坪内先生が御帰京なすったので持って行く筈の「貧しき人々の群」をなおし出した。 最初の二つが余り説明的になって居てつまらないと思う。 み返して見ると如何にも単純な様でいやになって来る、 「カラマゾフの兄弟」 が私は書かずには居られな の結 構

四月二十九日(土曜)

やめて仕舞おうかしらん、

大変興奮して来る。

「アランディンandパロミダス」を読む。

くふくまれて居る。 いて居るがあの人物とはまるで異った思想である。 メーテルリンク一流のものであるが、「ペリアス、メリサンダ」に見たと同様 特にアストレーンは悲しみのかげから歓びを見出す人である、ほんと 「智慧と運命」の云うことが非常に多 の人が動 人一人を暗くさせ得る人は非常に剛胆な人である。

の運命を知った人らしく見える。

夜 「貧しき人々」を書きなおし始めたけれ共何だか昨日睡眠が不足だったのでねむい

からやめてしまう。

火曜の会には、 精神的疲労の事を少し話して見ようと思う。

四月三十日 (日曜

早速告発してしまった。母様は心配して居らっしったが仕様のない事であろう。 昨日六が 田舎へ帰った。 婆やの金を盗んで行ったとかで、半分狂気した婆やだけあって 非常に興

奮して座っても居られない様子を見ると気味が悪かった。

貧しき人々の群」第二まで書きなおす。

家から泥棒の出ると云う事はまことに気みが悪い。

のは分って居るのにそこを思わない被害者や巡査の心持がいやになる。三円たらずの金で て居らしったらしい。 母様などは仕たことは憎いが罪に落すのは堪えられないと云う様な混乱した気持 私も、 若し牢に入る様な事にでもなれば、 更により悪い 人間

、四月の感想)

は種々の境遇に変化があったので四月は非常に長くたって行った。殆ど私が退屈した程 何と云う事はなし、 青葉が美くしくなった。 私 0 周 空の色が生に満ちて来た。 囲の事情から自分が全くたった一人定まった先手の星を持って 四月は美くしいと云うけれ共、 此度

多勢のものが迷うて居る中をかきわけて行こうとする生活の様に思える。 それは面白い―― 嬉しい事でもあるけれ共嬉しい事でもある。 今年になってから始めて

センチメンタルな〔以下空白〕

、四月中の重要なる出来事)

四日 入学試験 合格

十日 宣誓式

五月三日 (水曜)

欠席

「貧しき人々の群」の書きなおしにかかる。

When I think about my life, my heart beats quickly with sorrow and joy.

五月四日 (木曜)

I had a hard work today.

五月八日 (月曜)

とうとう出来上った。

所々もあるあれをどうして坪内先生にお見せし様とその事を思うと胸がワクワクした。 私は又興充して涙をこぼした。そして百九十枚ほどに書いたけれ共、少しは気に入った

私はうれしかったけれ共苦しくて夜ねむられなかった。

s covered with tears. I am very happy to finish my Writing already but wonderful sad came upon my heart and my eye

Why so excited my heart? Be still! My young heart!

五月九日(火曜)

坪内先生の所へ行く、母上と。

最初の頁に指を触れられたとき私はひったくりたいほどのよろこびと不安の混乱した心 出て行らしった方はいいお爺さんであった。私は何だか心が安らかになる様が気がした。

持になっておののいた。

よく読んで見て批評するといって下さった。 最初の頁と中頃を見てとうてい駄目なのは

すぐ分ると云う事であった。

どうぞよくあってほしい。どうぞよめるものであってほしい。

私はどんなにはりつめた心でこの一月ほどを送ることで有ろう。

五月十日 (水曜)

t grand world, but their hearts seem not so great as their speeches t too long time so I was very tired of and couldn't continue well. They say with loud voice and abou Kikaku complain in parts began, many girls up to the higher place told some worlds. But they spen Today I went to school, and was tired very much. After school a meeting was called in Kodo and

五月十一日(木曜)

Today it was very hard windy, and my soul was restless and unpeaceful.

At night I studied very much and make ready for Saturday's lessons

五月十二日 (金曜)

absent.

It was very unpeaceful to-day. Many feelings and thoughts came up to my heart. It〔以下空白〕

〇五月十三日 (土曜)

心理学講話をききに行く。

音楽の発達は分り易くもありあまり人をあきさせない講話であった。

体の工合で気分が悪くて仕様がなかった。

長井博士の副腎分泌物と精神作用との講話は興味を持たなかった人も多くあったらしい。

小此木先生へ手紙を出す。 『作楽会報』へ十頁ほどのものを書こうかと思う。

五月十四日 (日曜)

午前 中、 文房堂に行って原稿 紙、 インク、ペン、ノートを買って来る。

風がひどくていやになる。 裾がペカペカして歩くのをさまたげる丈でも、 日本服はよく

ないなあと思わずにはいられない。

が頭 等の事を 何だかやたらにいらいらして夜はなにも出来ない様な心持になって居た。 人を君臣と云う名で自由にして居った時代の夢をさませないで、 に浮んで居る。 「殿様御めさまされましょう」という題で皮肉に書いてみたい。 書きなおしてよいものにしたい。 会報へ十頁は何か軽いさらりとした 家をかき廻される華族 追憶の書き出

しめった闇の中に蛙が鳴いて居る。

ものにして見たい気持で居る。

気持がこんなにいらいらする事は苦しい。

五月十五日(月曜)

欠席。

日中 いらいらしい気持になって何も出来ずに心持悪く暮した。

四時から学校に行ってノートをとって来る。

電車 の中で岡田さんに会う。 相変らず鋭い調子をして居なすったが疲れたらし い様子で

あった。

テリックになって泣いたり笑ったりしてしまったので朝になるとつかれてどうしても起き 風が強く吹いて居る。 『会報』へは、「育ち行く彼」を書こうと思う。 昨夜は妙にヒス

五月十六日 (火曜)

られなかった。

教科書のネロの最後を読む。学校へ行く。別に変った事もなし。

私が若しあの場合になったら必ず左様であろうと思う様な心持がうかがわれ

ネロの死に様は、 死に持った考えは、只単に臆病なものであろうか。 私はそれを只一口

に云う事は出来ない。

彼は所謂悪い事はして来た。

けれ共愛すべき所々を持って居たのではあるまいか。

云う気持になって居る。

私は たしか に左様であると思える、 そして彼の心をどうかして何かに表わして見たいと

五月十七日(水曜)

出席、実践論理があった。

小部 ある程度まで明か う事には べてを同 云おうより本能と云う事につれて一般的に第一に頭に浮ぶ習慣をつけられて居る限 この日 : 分 の 私は に私 感する事は出来なかった。 みに目をつけたことを非常に耻かしく思った。 合点 は、 出来なかった。 になったのを感じて非常にうれしかったとともに、 久米氏が先に本能の尊重と云う事を云った意味がよく分らなかったのが 若しすべての人が今まで云われて来た天才であるなら すべては天才である、 けれ共天才と云う論 人間のすべては天才であると云 私がごく表 この意味 面 には 的な ら ħ す た

五月十八日 (木曜)

それはおそろし

Ñ

事である。

欠席、 雨が降る。 しとしとと秋雨の様な雨が絶え間なく降って居るので足の裏の筋がつ

れて不愉快である。

武者さんの 過敏になった頭が妙にイライラして殆ど苦しい位かんしゃくが起り情なくなった。 「後に来るものに」を少し見る、ほんとに彼の人の言葉は香り高いものだと

思う。 大様などことなく上品な言葉を持って居る人である事をつくづく思わされた。

悪霊」をかなり読む。いつもの涙ぐましい位の感激を持つ。

こんな偉大な人の前に自分は何の光りを持つのか。 哀れなものよ、 けれ共私はその光り

を持たなければならない。

五月十九日 (金曜)

追憶」を書きなおし出す。 読んで見ると、 我ながら満足出来ない所がある。

五月二十日 (土曜)

追憶」を書きつづける。もう大抵出来る。

かった。実感は恐ろしいものである。 夜になってあの死に顔の所を書き出そうとすると、妙にこわくなってどうしても書けな

1 つまでかかってもいいから、 変質他愛病患者を中心にした貧民窟のことを描いて見た

\ \ \

ので、 非常にのぞんで居るが、まだ一度も左様云う所へ行ったこともないし、 まだ一年二年はかかる事であろう。 けれ共どうか好く立派なものを書きたい。 見たこともない

若し正直な観察を以て見てかけば必ずよく出来る事はたしかである。

五月二十一日(日曜)

漢文。「追憶」をかきあげてとじる。

母様によんでいただく。 かなりすなおにかけて居るそうだ。

思い出して、 それにつけても坪内先生の方が案じられる。この二三日は夜床に入るときっとあの事を 若しよかったらこうし様若し悪かったらどうし様などと云う考えがチラチラ

湧いて来る。

「貧民心理の研究」を読む。

価値もないものになってしまって居る。 斯様に彼等の世界があって、 彼等の真理のある中に今まで持って来て居た道徳律は 彼等-丈よりも退化した者共が尚私共の仲間 何 で 0

あることはまことに恐ろしい。

五月二十二日(月曜)

坂本さんの所へ行って種々話す。

人を殺した事が悪い事だと云うので、 政府が殺したものを殺すのはどういうわけかとい

うことがほんとうに考えられる。

いながら何か起ると、自分自身それを裏切って居るのはまことに悲しいことである。

又、自分は単純によい、わるいで人間のすべての行為を判断して行きたくはない。

社会的感情に支配される様に子供の時から癖づけられて居るのはいやである。

どうかして何事もしずかな理解のある気持ですごしたいと思う。どうかして左様ありた

い。父上北海道出発。母上歌舞伎。

五月二十三日(火曜)

小池先生から電話がかかって来る。

一日何をすると云う事なしに暮してしまった。

毎日雨が降ってうっとうしい。

夜千葉先生へ手紙を書く。

感じて居る事を種々思って居る事

五月二十四日 (水曜)

千葉先生へ手紙のつづきを書き出す。

小田切の秀子氏へ返事。

しさに迫られて居るのかと思うと、可哀そうになって来たが何とも云ってやり様もなかっ

あの人が行ってしまったので、彼那してとりとめのない様な悲

た。

夜なんかして、「ドリアン・グレー」を読んで見る。

つもながら驚く。Longfellow's Poemを一つ二つ見る。Day is doneと云うのはしずか

やわらかみのある快いものであった。明日から学校へ行く様にきめる。

な、

五月二十五日 (木曜)

出席

に行ってちゃんと云い立ててきた。 ぐって先生に云ったと云う事を知らしてくれたので、どうでも好い様なものだけ 今日は種々な事があった。学校へ行って見ると、 何でも他人のことまで立ち入ろうとする半目醒 内藤が、 電話の行き違いを妙に ħ の女は 共 か んた 昼

やり切れ

ない。

夜は の所 ります」と云う。 は妙なものだ。 今まで持って居た好意が一時に消えた様に感じた。 つかれたが愉快だった。 へ行って、 級会の かなり緊張して話して来た。 二十を越したものの口のききかたは違うと思った。 美」 の事について一寸喋る。 『水の上』を貸し De. Profund を借りて来る。 千住氏が妙にチヤほやする。 西岡が 「読書をなさったでしょう分 夜久しぶりで関先生 人の心

五月二十六日 (金曜)

ことはどこまでも素直になって考えなければならない。 いやになった。 今 学期 のモットーをきめるために種々帰りに相談したけれ共なかなか定まらないので、 妙に投げやりな、超然としてしまった様な口調がいやである。 千住さんはどうしても浅っぽい人 研究すべき

である。

昼 の時間に昇夢さんのツルゲーネフの伝を読んで、 急に 「獵人日記」 がなつかしく感じ

られる。

どんな人でも偉かった人々の一生を読むと種々の感激を起させられる。 人の一生、 それ

は様々の形式と色彩を持って居ようけれどもいずれも尊いものである。 自分の 生涯 も何物か人に与えるものでなければならない、 同時に最も多く吸収したもの

五月二十七日(土曜)

でなければならない。

なのかとおどろかれもする。 時間おそく行く。 帰りに町田さんと一緒に来る。 電車の中なので自分丈になれないで困ると云って居た。 二十近くもなって居て彼那単純な心

夜、 「獵人日記」を読んで見る。 もう三年ほど前に一寸見た限りなので新しい発見も多

いが又訳の悪いところも気になった。

になって悲しくて仕様がなかった。 夜は、 作物に感激させられたのと夜がしずかにしめって居るので、 妙にセンチメンタル

五月二十八日 (日曜)

漢文。ワイルドの 「獄中記」 の関先生から拝借して来たのを少し読んだが原本の方が省

略してあるところが多かった。

少しむずかしすぎると思った。 夜錦輝館へ行く。いつもながらよくするものだと思って

見て来たが疲れた。

いつでも見たいものである。 趣味は低級であろうが何であろうが目先のたのしみに丈は

なる。

夜久しぶりでよくねた。

五月二十九日 (月曜)

昼までにして帰って来てねた。

外の明るい様な時に部屋の中丈くらくしてさっぱりした布団にねて居ると、妙に淋しく

気持が沈んで来る。

此頃は頭の工合があまりよくないので感じがするどくなって来て困る。種々な思い出だ

の悲しみだのが一杯に湧いて来る。

夜は久しぶりで本田の道っちゃんが来た。

五月三十日(火曜)

級会がある。 校長の信念の涵養と教育とか云うのを読んでうつす。 終りの少しを私が読

して、果物をたべたりなんかしながら種々の事を喋る。

ラムの沙翁を読んだが、あまり抜いてあって面白くない。

んで解釈をしたが皆さほど分りもしない様子であった。

八時頃からねる。

十時頃に起き出

昨夜道っちゃんが云った事が非常に頭に残って居る。

何と云う悲痛な言葉なのか。私の可哀そうな人よ。 I can not love so long as anyone can——yes, I know it clearly. So please love me till I will die.

五月三十一日(水曜)

夕立の様に夜になってから雷がなったり雨が降ったりして、 如何にも夏になった様な心

持を与えた。

昼間は苦しくあつかった。

実践論 理、 非常に感激させられた。 私は多くのものを吸収する事が出来た。

[五月の感想]

種々な点で私には記憶すべき月であった。

第一私 の生涯に第一の経験として、 あの「貧しき人々の群」 を坪内先生に御目にかけに

出した。

それからこの想が醗酵したら非常に立派なものになるべき変質他愛病者とその周囲に対

する思いつきを得た事もよろこぶべきことである。

かなり思想的に生育の出来た月ではあったけれ共、 頭の工合を悪くしたのであまりはか

どりもしなかった。

精神的 云う事が 私はこの月に本能の尊重を知り、 'にも私のバランスが破れて仕舞うので一年中一番なやましい月であった。 いつもの 朧 気 ながら分ったことを有がたく思う。 宇宙の真の運命と云うものはどう云うものであるかと 新緑の色は圧迫が強くて、 肉 体的にも

様に。

[五月中の重要なる出来事]

八日 「貧しき人々の群」脱稿

九日 坪内先生に御目にかけに持って行った。

二十一日 「追憶」

二十四日 千葉先生へ手紙

二十五日 関先生、久しぶりで御目にかかる。

二十七日 「雨が降る」三枚二十二日 父上北海道御出発

二十八日 「動かされないと云う事」

六月一日 (木曜)

しても復讐をすると云って居ると云うので母上が心配して居らっしゃる。 午前中で帰って来る。久米氏の「牛乳屋の兄弟」が問題になって居る。 若し二人が決闘 石井さんがどう

でもする様な事があれば何と云う事になるか。

劇作家は決して自分が主人公となって血を

である。 ると思う。石井も又、心にそうまでも思って居ないのに彼ゝ《ああ》まで云うのはいやみ 出さずともよいのだ。そうさせるKは残しい。 凡人は天才の犠牲となるべきが至当である。 斯様な事は私もよく心得て置くべき事であ

六月二日 (金曜)

父上御帰京。 学校から帰って見ると、お母様も御留守。

夜どこかで一緒に食事をして帰っていらっしゃった。

もう一年の半分に来たのかと思うとおどろく。

今月の十五日は今年の丁度まんなかにあたる、何と云う早く立ったのか。

美さんと其周囲」と、 私は情なくなってしまう。これだけの中に自分は何をして来たか。 「貧しき人々の群」と、 「追憶」と、 その他の一寸したものが僅か 彼那 いやな、 「お久

許りではないか。

今までこの様なら又これから先もこの様に過ぎ様と思う事は恐ろしい事である。

六月三日 (土曜)

蜷川氏より。

小此木氏より電話。

れが第一になって次の「小さき憂悶者」が第二になりもう一つ安積へ行って居た間 でも書いて見たら面白そうであると思う。そしてすべてを「記憶の断片」と云う名にまと 今日学校でふとこの間書いた「追憶」を三部作の一部と仕様と云う事に思い付 いた。 のこと あ

ch をどうせ読むんだから訳して見たいと思う。 今月中には出来るであろう。よいものにしたい。 部屋をすっかりかたづけて北をあける。 夏休みにはツルゲーネフの Clara Millt

風通しがよくなった。

める。

夜蜷川さんから手紙が来る。子守唄を送って来れる。

静かな声で いばのおりどの、 しずがあやーに」とゆるく歌って居ると、 昔の種々な

心持がしみじみと戻って来る。

六月四日 (日曜)

暑 如何にも夏らしくなって来た。風がかなりひどく吹いて居る。夕方から山の手を

を読み動かされた。 幾分不愉快な様であった。 方がいかほど人間らしくあり尊ぶべきであるか。 人の土方が大変無邪気な愛すべきものの様な様子をして居た。 二人の若い男を見た。 い月を輝かせながら涼しく更けて行った。 廻りして竹葉で食事をしてかえる。 佐藤さんから電話のときに坪内先生の事や何かの話が出た。 やがて御前方も死ななけりゃあならないのを知って居る 電車の中で、 銀座を一寸のぞいて来たが、 玉突きのキューを持ちながらふざけちらして居る 「無題」三枚を書く。 なまじいの紳士より彼等の あまり軽すぎる空気で 「後に来るものに」 のか? 夜は美く

六月五日 (月曜)

今日の様に暑いと又五色の霧を思い出した。

以上 そうなのでやめにした。夜は花火を散らすとかで父母英男出かける。 を御返ししメーテルリンクの批評を読んで来る。帰りに Little Women. 55 を買って来た。 昨日から青山でスミスが人民の心を熱狂させて居る。ああなると単に飛行機のりと云う 欠席、 の感激を与える。 随分暑く風が強かった。午後から小此木先生へ行く。 立派なものである。今日も国、道男が行ったが塵と音響がさぞひど 『アラディンとパロミダス』 小此木先生の所で、

ンダ」と「アラディンとパロミダス」の比較をして見ようと思う。 Longfellow の詩のよいのにしるしをつけていただく。この夏休みには「ペリアスとメリサ

まだあつさにもなれないので、一寸日が強いとたまらなくあつい。

六月六日(火曜)

緒に行く事になった。 いたことであろう。 坪内先生の所から御葉書で、午後から母上が行らっしゃる。どんなにこわごわ批評をき けれ共苦労は無駄で、大変にほめて下さったそうである。 明日また一

これから私のほんとうの生活がはじまる。これで漸々私の出発点が定まった様なものである。

増刊に出させる様に口をきくと云って下さった。それから単行本にするのだそうだ。 私 iの 周 囲に 沢山満ちて居る敵に対してどの位自信のある事だろう。 『中央公論』 の秋季

私の今までの努力は決して無駄ではなかった。

私の生活は真に力づけられたのである。

六月七日(水曜)

坪内先生の御批評をいただく。

一、思想の健全なる事

一、文体の短かく女らしい欠点の少ない事

三、観察のこまかなる事

まで云って下さった。終りの方を少し書きなおした方が好い所があると云うので原稿をい

種々力をつけて下さった。安心していそがず迫らず書けばきっと立派なものが出来ると

ただいてかえる。

かえりに妙な田舎田舎したすしやに行き、 大味氏□に行き、 錦輝館に行ったら夜の六時

からでだめ。

中西屋へ行ったけれ共買い度いものなし。

六月八日 (木曜)

日かく。 一字の間違いまでちゃんとしるしをつけて下さってあるのには感謝しずには

居られない。

六月九日(金曜)

一日書き、夜錦輝館へ行く

六月十日 (土曜)

明日出来上るつもりなので坪内先生が若しまだ東京に被居しったらあしたの午後に自分

で上ろうと御たくにききにあげたらきのういらっしゃったそうだ。

六月十一日 (日曜)

今日午後出来上ってとじる。 夜紀伊の国家へ電話でうかがってから、 文丹と手紙と原稿

をかきとめでお送りした。

朝葦の湯からわざわざ御葉書をいただく。

かくあの男もなかなか裏のある生活をして居るのだから……。 ては或ることを知って居るので久米さんばかりどうのこうのと云うことは出来ない。 石井の婿だと云う人が来て久米氏の例のことを云って帰ったが、私共もあの人達につい 夜道三氏が来て種々はなし

そうである。

の末今度結婚するのに母がむずかしいと云う事を話した。どこでもある事だ。

六月十二日 (月曜)

結婚

の幸福などと云うのもさめ、

明晚小此木先生

六月十三日 (火曜)

面かげがよく出て居ると云うはなしをいただく。 ーラン)を買って来る。文房堂から原稿紙三百枚。 夜東京堂へ行き、 『犯罪の研究』、 『セバストポール』、 親類の事だの、 「追憶」をかえしていただく。 『トルストイ』 嫁姑の事などを話して来 (ロマン・ロ 叔父の

かったとおっしゃる。

る。

学校の方は選科がよかろうと云う事である。

タゴール氏の演説の声は何とも云えずよ

居ると云うことであり又その容貌もすべて世のことを超越した様な輝きを持って居られる 父上母上外出。 タゴール氏は声だけでも人を動かすに足ると云うほど立派な声を持って

六月十四日(水曜)

が誰 洋行させる覚悟をなさって、 な声でどなって居た。 として電報を下さった。 行きに物集さんのわきの小さい家で何だか伯母とその世話になって居る娘が喧嘩 とり紙を買て来る。 「セバストポール」 か 日むしむしと暑い日である。 の歌集らしいものを持って居た。 あの大観音のわきの店で南洋の槍があった。 夜父上御出立。 の訳が 有難 百合子はどうしてもイギリスだとおっしゃる。その時 いと思う。 少しわるい様なので残念である。 銀行に行く。今度新らしく来た人で神経質な形をした人 午後坪内先生から「ゲンコーウケトッタツボウチ」 私が始めて彼の銀行で見たことである。 「セバストポール」と、 一寸面白い 母上がもうすっか 「トルストイ」を少しよ ものであ 帰 の様子 て大き り私を 1) É 吸

くない。 もう梅雨に入って居るそうで雨が夕方から降り出して少し涼しくなったが頭の工合はよ 月見草とダリアが草畑に咲いた。

などを思い浮べる。

六月十五日 (木曜)

よかった。

も分る。 であると云う事をなさけなく思って居たか、 我等何をなすべきか」を一寸読んで見る。 引いてはあの金を持たな 彼が、どんなに自分が農民を支配し得る地主 い心持になったこと

のだ。 ない人だとつくづく思う様な節々がある。 いだろうのに。 とうとう卒業されるのはお目出度いがそんなにすぐやわらかものの着物をきないでもい 石井が来て久米氏のことを母にたのんだと云うので夕方久米氏を呼ぶ。 久米氏はすべての要求を出来る丈は受け入れると云って居たそうだ。 坪内先生から熱海にうつったと云う御葉書を下さった。 ああ云う顔の人はフランクな生活は出来ないも 石井も男らしく

六月十六日 (金曜)

ところがある。 Little Women を読む。 まるで教育方針が違うのが明かに分る。 日本の娘達の様な生活をして居る女の子がみじめな様な気のする

まで帯揚げのしんとピンを買いに行く。ほこりがたたなかったので強い風も割合に心持が 日中はれたり降ったりしていやな天気である。 足駄の歯をなおさせて置く。夜、 近所

漢文の先生に例の事を一寸申しあげて置く。

六月十七日 (土曜)

Little Women を読む、 今日は妙にセンチメンタルになって、 夕方にはたまらない心持に

なって仕舞った。

寸読んだことがあったがまるではじめてのものの様な興味と感激を覚えた。 自分の事を三人称にして考えて見る癖は私の持って居るのと同じである、 クープリンの 自分の事を「彼は……」と云うときの心持は私によく分る、 「決闘」をよむ、 主人公、 ロマショーフ少尉は実に可愛らし 先にもう三四 左様 **,** な心 年 彼のすぐ 持に 前 な

「生活の河」 実に立派な作である、クープリンの主人公には……もとより沢山はよんで居ないけ の主人公のどれにも愛すべき泣かずに居られない様なところがある。 ああ云 ħ 共

又ああ云う心持がどこか心の隅になければ人間は情ないものになる。

う風に人を見なければならない。

六月十八日 (日曜)

日 雨が降って居る。 周囲の緑の中に紫陽花の花が美くしく見えた。

ある。 縫いあげて仕舞われた。 さんなのか一寸は分らない今の日本の有様である。 を持って来て見せて下さる。 非常に単純なのに 喫 驚 させられた。 ので人相が悪く、よく下等なものの様な感じを与えた。 I までをすっかり見る。 青雨ら 可哀そうなのは奥さんである。又一苦労ふえるのだろう。 夜になって雨が上って仕舞った。 い響で降って居る、 大瀧氏来訪、 心持がよさそうである。 心がしずまる様である。 彼のおばあさんが脳溢血で半身不随になって居ると 何でも手早い腕を持って居る人は幸福で 夜山尾来る、 母上一時間ほどで寿江子の単衣を 石川先生が貧児のことを書いたの 夫の奥さんなのか姑の奥 頭を三角刈りにし Little Women Chapter II て居る

を馬鹿にしたらしく種々云うのが気にさわった。 お雪が一寸ばかりのはこべを持って来た。 心持が見えすいていやであった。 道男のこと

六月十九日 (月曜)

出席

十一時から学校に行く。 松が少しまるくしてあるのでよっぽど心持がよくなった。

かな さけなくなる。 ぶべき心持である。 もどうせ弾く人にはなれないからせめてきける人になるのだと云って居た事は女として尊 書棚 か 出 に氷店のカーテンの様なレー 来な 1 昼の ものだなどと云う事をいつもよりたしかな口調で話した。 時間に小寺と話をする。 スのかけてあるのは 小倉末子さんの子供時代 いやである。 . の 事 あ λ そし や人の な趣味 て音楽など が 批 とは 評は な

ある。 冨 山 自分をきく人、見る人として完全なものに仕様とする心持には若い娘は 房へ 若しそれが本心だとすれば尊ぶべきことである。 『沙翁傑作集』 をよこす様に云ってやる。 私にはそう云う気にはなり得ない。 なり難 1 も ので

六月二十日(火曜)

何だか 野先生はいつもの様に奇麗な顔をしていらしった。 下さった。 む 坪 内先生か 切りつけたものの様になりは つくて体中の血がにている様な気がする。 終りに ら原稿を送って下さる。夕方御手紙が着いた。 自分の感想 の様なものを入れるのはどうだと云って下さったが自分では しま いかとあやぶまれる。 吉原さんはいかにも女学校を出たばか 帰りに吉原さんと久野先生に会う。 前よりもよくなったと云って 早速御返事を出 しておく。

りの娘と云った風をして居た。

お っかさんと云う人は只娘を守って居る様な人に見える。

なる様に落着かない心持になって居るのを見るとかわいそうになった。 国男が妙にメランコリーになって神経質になって居た。 私の先の様な又今でもときどき

六月二十一日(水曜

欠席。 雨が 降ったり晴れたりきまらない天気でいやな日であった。

ちよく降りもしない天気だとすっかり頭にこたえる。 小此木先生から御断りの電話を下さる。 今日の様にハッキリてりもせず又ザーザーきも

り。 れないからどこへ行くにも相当なものは持って行かなければならない様な心持で居る。 ないほどになって居る。この頃はすべて自分の周囲のものが不趣味だったりするとやりき んに毎日べたつかれてもたまらない。もう少しどこへ行ってもいい親類がほ この頃少しずつ滋亜 今年はどうしても早くどこかへ行かなければならない。しきりにそう思われて落つか 湖へ来いと云って来てあるけれ共彼那奥さんの居る所に居るのもたまらないし秀子さ をのんで居るがいい。 小田切の秀子氏から手紙をくれる。 しいも のであ 例 の通

六月二十二日(木曜)

う事だ。 暑 い日であ 此那 る。 心持だと勉強する気にもなれ 脚気の様で体全体 の心持がたまらなく悪い。 な V) 明日国文の試験があると云

こぼ がせまって来ると私はおととしの夏を情なく思い出す。 んでないから分らないけれ いがけず、 今年はどうぞ病気をせず、 足や手が熱っぽ した涙が、 『中央公論』 自分の顔の上に降 いのではかって見る。 の長田さんの 共 いやな事もなくてトントンと進んで行ってほ 長田さんの捕えた材料としては、 りか かったときの心持なんかも、 「港の町」だったかを少しよむ。 一寸もなかったのに少し安心する。 夜中に、 私には珍らし 氷嚢を押えながら はっきり思い まだすっ U い。 七月 いものであ 学校で 出 か 0 りは 「せる。 母 +様の 八日 恵 ょ

六月二十六日(月曜)

る。

をかけて見ると、 坪 内先 生か ら 中 わきに人の声 央公論』 の瀧田哲太郎と云う人への紹介を下さったので昼頃すぐ電話 瀧田さんと云う声が聞えながら御留守を喰わしてくれ

非常に不愉快でたまらなかったけれ共しかたがない。 明日なら八時頃に社に来ますと云

た。

う事なのでそれなら早速あした出かけ様と云うことにする。

たのむものの弱味と云おうか、 落ち目と云おうか ――とにかく妙な心持がしていやであ

六月二十七日 (火曜)

った。

ある。 腹 いなところであった。 ったりするのがまことにいやであった。『中公』の方は九月までふさがって居るが、 の中は毒のなさそうな人ではあるけれ共、どこかああ云う仕事をして居る人共通ないや 午前中なら居ますと云う電話が中公からかかったので雨の中を車で行く。かなり小ぎれ 来月の一二日に返事をすると云う事であった。 の方は一つ長いのがあいて居るから若しよかったらその方にもらうと云うことで ――口のきき方も妙に事務的だったり、突っこんだ話が出来ない様なところがあ 瀧田さんと云う人、赤くふとった、赤坊の様な髪の毛の人である。

かえってから丸善に行って、『アンナ・カレニナ』、 『生物学ト哲学ノ境』、『ペリア

ストメリサンダ』、 『アラジィン、 パロミダス』 『ベラミー』ヲ買ってくる。

六月二十八日(水曜)

分って来た。「ベラミー」の中に現われて来る女の心理状態に刺激されて内省的に自分の 心をある程度まで自分自身のものとして見ることも出来る。 女としての心持をよく味って見るとたしかにそう云うところがある。 日、「アンナ・カレニナ」と、「ベラミー」をよむ。モーパッサンのあの心持がよく あの中の女の持った

どんな女でも女にかわりはないと云うことはたしかである。

「アンナ・カレニナ」はごくはじめで分らないけれ共、 トルストイの特徴、 メレジェコフスキーに云われてることも目立って見える。 矢張り驚くべきところどころがあ

六月二十九日(木曜)

石井、 対久米氏の会見、 私の書いたものの出ることを知って居なさる。 久米さんに一寸会う。『戦争と平和』を返してくれる。 母様がおっしゃったのだそうだ。

四十を越そうとして居る人の心持、

とくに母親の心持は私に分らないところが沢山ある。

下島さんが例によってもらいに来た。

安積へかえりたくないから東京附近に居ると云って居た。

めに、 居な れた事には う人も頭はダ 石井親 私 0 け 子で来る。 同情する。 両親に彼人の美点の多くが理解されたのはよろこぶべきことである。 れ共とうとうあの脚本 ークな人だ。 石井が けれ共それは何もあの人の価値を下げる事ではない。 .妙に神経的な高笑いをしたりして居るのが妙に響く。 あの位の年で、 「牛乳屋の兄弟」をすべて滅却 あんな口のきき様をするものに、 して詫び証を書か ろくなもの 此 0) 息子と云 事件 一 の た Ė Ú

六月三十日(金曜)

はな 門まで送って行って渡辺のわきで久米さんに会う。だれ あろうことはのぞまないのだからしかたがない。 しだめだったら単行本にして新潮か春陽堂から出すことにきめて来る。 人はよく見かける顔 午前 中坪 内 又長すぎることもあるけれ共自分として最初のものがわずか二三十枚の 先生の所へ行って、 の様 であった。一 『中央公論』 寸目礼しただけでお茶の水の方へ行ってしまった。 の方の御話をして置く。 かえりに母様は上杉家へ御よりなさる。 か友達二人と一緒であった。 あまり長いから若 雑誌むきの うもので うもので

たと云うのだろう。一つ発表したらゾクゾク出さなければいけないと云うので、 あ の人の形を見ると、実際かわいそうになって来る。 あんなにしょぼしょぼしてどうし

〔六月の感想〕

を又御目にかけることにする。

此の一年の真中の月は私の一生に大いなる意味を持って居る月であった。 私の第一歩は

漸々かたまろうとして居る。

居たことが自分にとっては実現され様として居る。

今年の正月の一日に久米さん達と集ったとき、今年は何かありそうな年だと云い合って

私の一生の中最も記憶すべき月なのである。

これから先の自分の努力の如何によって自分の位置はどれほどにでもなって行くのであ

る。

「あせらずになさい、きっと立派なものがかけます」

とまで云って下さったことはどれ程自分の進む道をたよりあるものに思わせる どうぞ此の月の事を只に私の日記に― 生涯の記録に意味のあると云うばかりでなく、 か?

世界の文学史上に記念すべき月とさせたいものである。

今の夏は若しかすると東京で暑い思いをしなければならないかもしれな

けれ共、そんなことは何でもない。

想や期待やよろこびやに動かされて自分が何だか非常に動かされて居るのを感じる。 私は自分のする丈のことを一生懸命にしてさえ居ればよいのだ。 此の一 月は、 種々な空

〔六月中の重要なる出来事〕

四日 「無題」三枚

六日 坪内先生より葉書母上参上批評を承って来る。

七日 自分母上行く。 原稿を返していただき『中央公論』 の秋季増大号に出せたら出し、

そうでなかったら単行本とする事に決す。

十三日 十 一 日 終りの方をかきなおすのが出来て箱根葦の湯紀伊国屋へ御送りする。 小此木先生に坪内先生の事を御ききいただき、 「追憶」を見ていただく。

十 四 日 坪内先生から 「ゲンコーウケトツタツボウチ」と電報来る。

父上東北出張

十九日 富山 房 へ『沙翁傑作集』 を送る様に云ってやる。

二十日 熱海から原稿を送って下さる。

二十六、 七日 坪 内先生御紹 介状を下さり瀧田氏に会い原稿を渡す。

七月一日(土曜)

三十日

坪内先生

0)

所へ

上って若し

『婦人公論』

がだめなら単行本にする事にきめ。

共ま る。 を書く、 彼那ことはあるまいと思って居る方が間違って居る。 日になっても冨山房が持って来ないにはおどろく。 杯になる。 雨が降る あ、 あんまりゾッとしない。 る。 十四枚。 のせて呉れるなら一種の広告で悪くはあるまい、 母上はとうとう作らないことにおきめなさる。 青雨らしい日であった。 夜はみみずが鳴いて、夏らしい――どこか淋しい様で力のある感じがみ 此那 のなら単行本で出した方がどれ丈いい 上杉家の披露会への着物を作る作らないで午前中は 本屋なんかと云うと此那ことはすまい、 『婦人公論』を出た次第にかって来 午後になってから、 偉 i, 私はかんぷくした。 か分らない。 條 け 0 繩

なぎって居た。

七月二日 (日曜)

今日寿江子誕生祝

のは よけい Charming であるわけだ。 どうしても西洋人は日本人よりも肉感的である。 を見ると、 同性でも妙な誘惑を受ける。 来て居る。いつもあのあお目玉をギロギロさせてしきりに野心たっぷりな形をして居る。 いやになるだろうと思う。 いくら金になるからって、 余り好い心持の日ではなかった。 つ、 木村来る。 腹が立たざるを得ない。 は つがいつもの様に大きな体をしながら、 彼那土人みたいなものにかつがれたり、 何でも商売になればつらいものだ。 うすい着物を透して四肢の見える姿で舞いさわぐ様子は 昼には寿江子のお祝で西川から御馳走をとる。 夜錦輝館へ行く。 女でも男でもそうだ。 名金会とか云うので、 くそ遠慮ばかりして居るの 先に来て居たアメリカ人が 何かして居るのは実際 女はそれだもんで 名金をした。 とがし

七月三日(月曜

「盗難」を書く。非常に暑くなった。

中公からの返事を一日待ちぼうけをして仕舞った。

七 月 匹 日 火 礭

方である。 早速意向を聞きにかけて下さったけれ共要領を得なかった。 って行って、 午前 中中公から電話で大変いそがしいから十日頃まで待ってくれと云って来る。 小川未明さんが先の頃三時間くらいずつ愚痴をこぼして行かれ行か 種々 の御話しを伺って来る。 永井荷風さんの事が出る。 ほんとに先生らしい落付きのあ 午後から坪内先生 る話 れ へ原 しが %稿を持 母 て居た 上が

事や久米さんの話や田村さん、

ある。 った。 はどうすれば 「天才は別で 夜母上御木本からブローチのい ある、 V Ż かと云うことは分らない。 けれ共どうも何か修養すべきことがありそうに思われる。 いのを買っていらっしゃった。 」との御言葉は非常に私を考えさせたもので dew drop の様でよか けれ 共それ

七月五 日 (水曜)

何故自分はこの様なものに先は驚ろかされないで居られただろう。「小さき憂悶者」の稿 戦争と平和」をよむ。ピエールもアンドレー公も、 ナタアシャも皆愛すべき人である。

を誤解し 様にまではっきり思い浮ばれて居る。 を起しかけたが最初の第一回が浮んで来ぬ、 てお愛素もなければ笑いもしないと云う様になって居ると云う。 上杉家披露会。 二行目にあたる部分からは声を出してよめる 池田氏夫人などが妙に貴婦人の品位 可哀そうなこと

七月六日(木曜)

である。

情で接せられる様になりたいと云う願望がはげしく私を苦しめた。そしてまだ感情として ざけて頭を痛くして仕舞った。 もどこかに未熟なところのある、それで居て燃え易い心持を自分ながらよろこばれない。 自分の心に芽して居る久米氏に対しても又誰に対してもどうか、友愛と云うおだや 云う立派に描き出されて居ることだろう。私は妙な心持になった。そして、この間 この二三日 passionate になって仕様がない。今日なども朝起きるとすぐ母様とふざけふ 間宮とこうとの事件が進みつつある。ナタアシャが誘惑されて行くところの心理は何と かな愛 中 から

なしには出来ない様な心持になって居た。 そしてそのあとでは重い陰気な感情が胸一杯に湧いて、何をするのもどうするのも痛み

七月七日(金曜)

なかなかこんで僅かあんな提灯一つや二つを只で出すと云うので非常に人が出 居る私にとっては却って気の毒な、 あ云う小店などでは私共を非常に優待して、自分は只の娘一人にすぎないものだと思って ことを嫌いながらどうもならないで居ると云う事は honourをうけるべきものではない様な心持がした。 して、それで居て別れられないのを考えて見ると、 今日母上午前中不愉快そう。 降ったり照ったりあんまり好い天気と心持ではなかった。 夫婦などになって、 いやな心持がした。 実にみじめなものである。 何だと云ってはいがみ合い、 夜「ペレアスとメリサンダ」を少し あれほどの人目の中であ 午後から伊東まつざかへ行く。 結婚をした て居る。 不機嫌に れほどの あ

七月八日 (土曜)

てどうとは云えないけれ共、 て居る。 「ペレアスとメリサンダ」を大抵読む、どうしても「アラディンとパロミダス」とは異 けれ 共同じものが材料としてあつかわれて居るのはたしかである。今言葉になっ もう少しよく考え読んで見たら必ず分るだろうと思う。

られる人が一人でも多ければ多いほど、 成瀬正一氏が渡欧するそうだ。この頃、 自分の力の乏しいことをなさけなく思わずには居 まるで変って来た自分の将来に対して、 先んじ

私の英国行もたしかになって来た。

られない。

この上はただ自分の力がつき次第であると思うと、 輝かしさに添うた不安や責任がきび

七月九日(日曜)

しく自分をせめる。

来てくれる。マンドリンの蓋を高井にきいて見たら二円五十銭だと云う。 と云うのは一種異って居るものらしい。 もないにはきまって居ながら、 して買おうと云うことになった。夜、食後庭でかくれんぼをやる。見つかったってどうで 午後になって本田道っちゃんが来る。仏語の速成をやって居るそうだ。 妙に緊張した、 息のはずむ様な心持を感じた。逃げる心理 それなら半々に 字引きを持って

七月十日 (月曜)

る。 にと思う。 降り様であった。 居ることである。 たのにと思う。どうか自分の仕事のうんと出来る職業を見つけるならば御見つけなさる様 「アンナ・カレニナ」をよむ。 とにかく私の感じた事は、 今日は梅 い様な気がする。 学校の先生なんかはもっての外だ。 雨のあけだそうで、 そう云う風に、 大学の卒業式のあった日だ。久米さんも、もう学士になった ついこないだ、 アンナは愛すべき女である。レウィンも尊い所を持って居 彼の中のどの人間でも各自にその尊うべきところを持って 夕方から大雨になった。 人間を見て行きたいものである。自分も亦そうであ あの赤っぽい紫のベルトのついた帽 中央公論は待って居たが何とも云ってよこ 珍らしく夏らしい、 子をかぶ 強 のに 1 って居 は 激 りた あ ま

七月十一日(火曜

に母上が電話をかけて御覧なさる。 「小さき憂悶者」 を書き出す。 何だか最初の言葉が出にくくていやな心持であった。 まだ見きれて居ないと云うことである。 **,** , つまでああ 中公

母上は、 二百部なり百部なりのものを持ってやると云ってくれるのを待って居るのじゃ

やって置くつもりなのか?

あないかとおっしゃるがそんなこともあるまい。

そんなにして出してもらわずとあんな雑誌ならおしくはない。

夕方高 橋夫人が来る。 何だかやせて、 おっかさんらしくなって来た。

なり、 あんなに睡眠不足で、気苦労をして、それでろくに頭は育たないのだと思うと気の毒に 一人の子供をそだてるために、母親がどれ丈苦労をするのか。 女の天職も亦易からずと思わざるを得ない。

七月十二日(水曜)

心した。 するので営業上から已を得ずことわると云って来た。少しもがっかりしないのみか幾分安 も考えられて居る。午後になってから文房堂へ行き帰りに『ドン底』と『春の水』 にして出すことにする。却って非常にうれしい心持がして居る。 からと云うことは、非常に自分の満足するところである。いよいよ新潮あたりから単行本 人公論』に出て居るどれもの様なものは自分は書きたくないしするから、 中公の瀧 田氏から返事が来た。よく書いてはあっても雑誌には内容がむずかしすぎたり 芸術的良心の満足とでもいいそうな心持がした。 あの中に出て居る いろいろ表紙のことなど 雑誌向きでない -婦

しが出来た。 て来て、 「春の水」の方をすっかりよんでしまう。 かなり自分の心持が出せたと思う。久米氏が徴兵検査をうけに行くそうだ。 夜は、 漸々「小さき憂悶者」の書き出

どうぞ当らない様に。

七月十四日(金曜

今日午後、 瀧田氏が見えて原稿をかえしながら、 『中央公論』 へのせるかもしれないか

ら百五十枚ほどにしてくれと云うことだ。

十日ほどの間をもらう。

けれどもまだ分らないのはいやである。 一度ことわって置いてどうしたのかよく分らないが先ずのるとすればうれしい。

明日法事でいそがしい。

く書きすぎて居ると云うのが欠点で、終りの方にもう少し自己を表わし、 行くのはやめにする。十日で書かなければならないのは少しいそがしい。 始めに自分の説 あまりこまか

明を入れろと云うことである。

七月十五日(土曜)

れば まらない。 でだらけはしまいかとたまらない。 のの弱みと云おうか、 とではな 午前 いけないとおっしゃる。自分もそうだと思う。 中坪 いと云って下さる。きっと中公にとって下さるのだろうとおっしゃる。 もうこの頃は努力である。 内先生 へ行って、 気おくれと云おうかふしぎな心理状態である。 その御話をして来る。 いろいろな事に、それ専門の良心が出て来ていてはた 実際努力である。 出来る丈して見るのは決して無駄なこ 私のすべての condition がよすぎるの けれども苦労しなけ たの

七月二十四日(月曜

\ \ \ もう少しで出来る。 今日は非常によく書ける。うれ 毎日一生懸命にはやって居ても日がせまらないと何だか気がのらな しい。 あしたはきっと出来上る。

ろ会って見る。 らしい様子をして居るのがいやである。 云って来る。 午後になってからお茶水の卒業生だと云う『日日新聞』の記者が電話で話をききたいと 私には分らないので母上が夜に来いと云ておやりなさる。大抵話のすんだこ なかなかどうしてしゃべれもするのをだまっておとなしそうに見せて居る

所がある。

いやな感じを与える。

中公の瀧 こっちでも婦人記者と云う目で見るせいかもしれないがたしかに或る臭気を持って 田さんから聞いたと云って来た。 監見満と云う人である。 あの□高とどこか似た

七月二十五日(火曜

居たけれども、 するがうれ せて行く心持はたまらずよかった。 原稿 が 出来上った。 車で一寸坪 随分苦しんだ。 今まで毎日毎日書いてばっかり居たので、 内先生の所へ御覧いただきに行く。 母様と一 緒に 一通り見なおしてとじるともう五 原稿を膝にのせて車を走ら がっかりした様な 時 過ぎて 心持も

分は 頃かえる。 もうずっと立ってから出来ると思えとしきりにおっしゃった。 御玄関に立って居ると、 年をとって段々考えが深くなってくるとおそくなるとおっしゃった。 小説を書くのをやめてしまったとおっしゃる。 二葉亭四迷が三年もかかって 何か読んでいらっしゃる先生の御声が高く聞えて来る。 「浮雲」を書いたときの御話をなさる。 若いうちは、 馬鹿 に書くのが早 もう立派な作は それ 夜九時 ゕ で自 つ た

七月二十六日 (水曜)

昨夜書いて置いた手紙を持たせて瀧田さんへ間宮をやる。

云うことであった。もうどんなに苦しんでも九日までだからと思う。 瀧 田さん自身出て来られたと云う。 二三日立ってから返事をする。 八月九日が〆切だと

たいと思う。 になって、 確定したこととして話されて居る。 は遠いことのように思われる。 にうれしくもなかった。まして父上の学号なんかが違って居るのを見ると、 新聞の予告でも見てから安積に行くことに仕よう。 学校の方も選科にしなければならない。 九月は十一日からでなく十四五日から学校に行きたいと思う。 この頃になって洋行の話がしきりに出て居る。 とにかくもう二三年の間の様子を見てからと云うこと 九月にならないうちに付をつけて置き 『日日』に自分の事が出て居る。 自分のことと それはもう 別

七月二十七日(木曜)

古市氏より

蜷川、古市、高嶺氏へ

午前中漢文先生、最中に高嶺さんから電話でおまねき、 午後から行く。 肩上げを下ろし

を並べて居るなあと思う。 を云って下さる。 字も達者だしなかなか自由に書いてある。 のであまり好 たりしてあるのですっかり大きく見える。久しぶりでピアノをきく。 けれどもあの部屋がものは好いのに何だか一致してすべてが互に fit して居な い感じがしな すっかり学校時代と違った字を書いて居るのを見ると、 \ <u>`</u> 故母君の御書きなすったと云う英語の手紙を見せてもらう。 鹿鳴館時代の産物であろう。 なかなか上手になっ 夜古市 私ば つか 氏から御 い折釘 祝

夜蜷川 友達の誰彼れを書きたい一句が浮んで居るがもう少し condense を要す。 高嶺、 古市氏へ手紙を書き少しゴーリキーの 「懺悔」 をよむ。

七月二十八日(金曜)

生活に追われることであろう。 云ってよこしそうなものなのにと皆云って居た。夜松岡さんが来る。 歩ずつ進んで居ることはうたがいない。 本田 もうじき奥さんが又子供を生むのだと云う。 の道っちゃんの所へ電話でいらっしゃいと云ておやりなさる。 すべては老いて来る。 何かしなければ実際にたまらないと思う。 生めよ殖えよはいいけれどもなか 自分も若いと云いながら死に向って 私のことを祝ってく 来なかった。 断り位 強い なか

reamy な日を送ってしまった。 嵐で千葉先生へも行かれず、どこにも行かれなくなって仕舞った。 妙に気の落着かない р

部の人の求めて居る、 く調和されて美くしい感じを与えた。 夜客室の庭をながめた。 ある大きなものがふくまれてある縁であることを感じる。 雨にしずかにぬれた苔と、光る木の葉と、ザワめく風とが、よ 初代柿右衛門の香炉は私でもいいのが分る。 今の一

七月二十九日(土曜)

蜷川氏より、成井氏より 成井先生、千葉

生へ

兵卒」はもう少し深くかわるところであろう。ロシヤの作品は、これと同じ材料をとりあ ないけれども今の同氏の作品を見ると、少なからずおとって見えるのはあやまりか?「一 と The House of the dead by Dostoevskii と『蒲団』を買って来る。「蒲団」は立派には相違 つかって居ても、 午後になってから中西屋と東京堂へ行く。Childhood, Boyhood and Youth by Lev Tolstoi ひどい嵐の夜、外へ立って見る、種々な心持になってスケッチを一つかく。 もっと深い。馬車にのせられないところなども、私はもっと書きたいと 氏家氏

来訪、

あの位の年になって妻を失った人の心持を考える。

七月三十日 (日曜)

身のそばにもある多くの誘惑と苦しみが渦巻いて居る。 けそうになって居る。 であるかを思う。 快な感じを与えられはしないけれども、 の位の体で、 てのことにふれさせようとするのは有難いことだと思う。 いかなどと云うことも母は云っていらっしゃる。 しずつ私に迫って来るのを覚える。 今日氏家氏が自分の養女に或る恋愛的事件を起して居る話をきく。 それ そのあとにのこされた小さい子供の運命などと云うものも考えて一つ書 は決して徒に破倫な行為とばかりは云われない。 もう少したってからの材料である。 けれども或る自信が幾分自分を変させて世の中のすべ ^ Passionと云うものがいかほど不可打抗的なもの 種々なことが世界には働いて居る。 漸々一人の人間としての苦痛 H が あの誘惑を受けて居やしな 決してそれを聞いて愉 あの位の年頃で、 私自 が あ 少

七月三十一日 (月曜)

夕方から錦輝館へ行く。 いつもよりよっぽど空いていたので楽であった。一寸も美くし

くな でならずと若さの力は私共をよくかざってくれるものなのだ。又そこいら中に水が までよいのだ。そのままに口をきき、そのままに笑えば好いのだ。 して居るのを見ると、 い人でありながら、さも美くしいということを見てもらいたそうにきどった形ですま 若い女に対してよく持つ一種の皮肉な心持が湧いて来る。 何もこんなにか あ 出たと たくま I) ŧ

が、すべてよその人のものの様に思われる。 もうれしくないのではない。 今日 『中央公論』を買って来てかざる。 或る一つの力が私のうれしさをどこかで押えつけて居る。 最後のところに出て居る自分の名と作品の題と さほどうれしくもない様な気がする。 けれど

〔七月の感想〕

さもよろこばしさも感じはしなかった。けれども今度私の処女作が のある月だったのだろう。 これから始まろうとして居る。私の光輝ある生活は、私をそしり、あなどり、 きまったと云うことは私の生涯のうちで最も意味のあることである。 四月に学校を卒業したと云うことはたしかに一般的に女達 けれども私は送り出されるままに学校を出た。 -私共位の女にとって意味 『中央公論』に出ると 私のほ さほどのうれ んとの生活は 或意味に於

なれ の戦は始まろうとして居る。私は勇気に満たされて居る。 ては自分達の仲間として共にしなかった愚かな者共の前に始められようとして居のだ、 ! 私の頭よ! 強く勇ましく、かしこく働いてくれ。 私の鼓動よ! 私はこの世界に、 たしかにつよく 自分の誕生 私

日が如何に誇るべきものであるかと云うことを示さなければならない。

[七月中の重要なる出来事]

一日 「一條の繩」十四枚

二日

盗

難

十七枚

十二日 中公から原稿は雑誌向きでないからとことわって来る。

十 四 日 瀧田氏· 来訪中公へのせるかもしれないから百五十枚ほどにしてくれと云ってく

る。

十五日 祖先の法事にて、 て来る、うれしい。 午前坪内先生へ行く。 中公からいよいよ秋のにのせると云っ

一十四日 \neg 日日新聞』 の人が来て、 記事をとって行く。

二十五日 書きあがったので夜坪内先生へお目にかけに行く。

二十六日 原稿を間宮にもたせてやる。

この日の『日日新聞』に出て居る。

三十一日 二十七日 高嶺氏へ行き古市氏から祝をたくされる。 『中央公論』 八月号に、 自分の名と題と紙数がのって居た。

八月一日(火曜)

の間 が出て居るのが、まだ泥水の一杯あるなかに八月の日がムカムカとてる下に、どんなにい 丁度千住に入ろうとした所で、向うから子供がかけて来て、ハッと思う間もなく車屋の足 いと殺風景な男女がはさまって居るだけ漸々だと云うようにしてウザウザと動いて居る。 そこいら中が洪水で大変だと云うので、午後から英男をつれて出かけて行く。 ずーっと田端の方から三河島の方まで行く。ずいぶん気の毒なものである。 から向うへぬけてしまった。そして火のついたように泣きたてる。 額からタラタラ血 車にのっ いやな臭

来たりして場末の特殊などよめきを作って居る。 大橋まで行って見る。 大きないかりが下りて鳶のものや巡査が立ち、人も大勢行ったり

やに見えたことか、車屋は一円とられた。

夜父上が雑誌が出来たらあげるところを紙にかきつけて被居っしゃった。

八月二日(水曜

疑問が苦しく起る、若しそうでないかと思うと、こうやって生きて居る意味が べにぶつかるとそれを通って又次の壁を見出す人間にほんとうに自分がなれる るだろうか? にどうして書けたのだろう? 行かないところが多いと思わずには居られない。 ない感謝 なり心遣 って来る。 千葉先: 感激し、 夕餐は 皮膚科の に満ちて来る。 いなりをほんとうにして下さることを思うと、 生 驚ろかされた。 か 私の生の目標は失われる。 ら御返事を下さる。 そう思うと、この間 医者と一緒に自笑軒でなさった。 母上もよろこび父上も感服して被居しゃった。 ますますトルストイは偉く思われて来るば 同じ人間とは云え、 大変に長い尊いものであった。 の日曜附録にあった武者小路さんの言葉、 故にどうしても私はそう努めてもあらせなければな 「戦争と平和」 私のどこかにあれ丈の力がこもって居 S家系統の人にはどうしても Flank に ほんとうに何と云ってよいか まことにうれ を沢山よむ。 かりである。 そして感服 分らなくな であろうか い。 <u>-</u>一つか あ ħ 喜び 丈

八月三日 (木曜

なに どんで居る。 めなけ なりそうなので ないので一二枚でやめにする。 で時を作らないので、 度 大変に のか? 只手 一生懸命 ればならない。 あつ 細 工 にすぎないようなものを出して若し通ったところでどれほどのそこに意味が になってやって見る時がないからつまらないと云って居られるがこれ 「世界の 「小さき憂悶者」の先へ廻す。 層雲が彼方此方に漂って、 秋でも、 尾島菊子氏が今年の文展へは驚かせるものを出す、 隅 で」を書き出したけれども気がのらない。 こんどの洪水で得た材なので、 正月でもを美術上の文展と比較すればよい はげしい日差しが凋んだ月見草に暑苦しくよ 学校が始まるまでには、 ほどが立ってしまうと弱く どうしてもよく書け この二つ丈はまと 文展 のだ。 には 何 は自 一年に も あ 分

八月 四 日

あ

る

うしてもあんまり好いのがなかった。 午後から古本屋 へ行く。 神保町から駿河台までズーッと屋並みに歩いて見るけれどもど けれども 『世紀病』 と、 『郷愁』 を買って来る。 中

西屋 へより、 国男は養鶏の本赤坊へはゴムで手足の動く人形を買って来てやる。 中西屋と

東京堂のまるで違う空気なども気がついた。

わなくっても手前の勝手だと云う様な風をした主人が居ると、 同じ古本屋でも、 人の好さそうな主人が居ると、 つい買いたい気がするが、 買いたいものがあってもつ 買っても買

小僧 の中でも感じの好いのを使うと使わないとには大した違いがある。 い買わな

いで通ってしまう。

八月五日 (土曜)

口惜しさ、 本 由 のみっちゃんが来る。 もどかしさが気をいらいらさせて書くことも出来ない。 別に変ったこともないが、 旅行をしたいのに出来ないと云う

八月六日 (日曜)

まり芸者になる女、 ならない、 午前おそくなってから坪内先生へ行く。芝居の話が出て面白かった。 何故なら比較的鼻が低いので横がおが美くしくないから。 須磨子は只単に度きょうがあると云えば□えるのだったそうだ。 木下八百子の噂、 日本の女優は好く 無言 つ

ず、 劇は I) こうの父親と従兄だと云う浪花節かたりの馬鹿の様な男が来て居た。 って居て下さったので、 知らな 自分も紙白粉を二つ買って来る。 或程度まで行くものである。 いと云う話、 明治初年のことなども、 そのまま大味氏へ行き、 秋田雨 信盛堂で歯みがきと、 雀氏は、 種 竹葉で食事をして三越へ行く。 まだ気分劇で、 々 話に 出 た。 英男の帽子を買って来る。 帰 舞台の実地のことはあ りに父さまが 四か 何 も買わ どでま

八月七日(月曜)

る。 S 人の着る薄羽織なんかが入用なのか、 もないことではあるけれども、 っ Н が か かけたい 小遣位 な自我のある人は或程度まで人に動かされない、 0) の金がないと云うことで三円かりて行った。それは男の一 か、 私は何にか その理由 「自分のもの」 はらう金もない は私に を持って居たい。 一種の反感をもたせる。 のに何故あんな無趣味な俗な たしかな心持を持ち得るものであ 又持たずには 生涯に対し 何]故書生 居ら の 身分で って何で ŧ れない。 Ō É

八月八日(火曜)

先 生 葉にはならな 生 何故そうならなければならないかと云うことを考えると、 べく生存し、 坂本さん、 Ħ つしゃった言葉の中には、 の に 千葉先 か の御書きなさったものを拝借して来る。 お姉さん か ればすっかりうれしくなる。 生の所へ行く。天気が照ったり曇ったりして居るのでいやであったけれども、 蜷川さん、 い。 は、 又箇体保. 先生に似た顔をしていらっしゃるがどうしても態度が それは非常に考うべきことだと思われる。 安藤さんなどのお話が出る。 存、 人類 種族保存を□□たい慾望を持って居るのは生れ の運命に対しての或る暗示のあることを感じるけれども言 甥子さんは男らしいブィビッドな方だ。 それから「人間は毎 或る大きな悲哀を感じる」とお けれどもまだ私には分らない。 ~無がしつけ 日のリズ つきだと思うが、 に見える。 可愛い。 ムを作る お 先

八月十日 (木曜)

なし重みのない人だ。あんなぞんざいないやな□□□ような風でよく外へなんか出かけら 大瀧夫妻に会う。 坂本さん 千葉先生へ上った話なんかをして、かえりに の所へ午後から行く。天気がてったりくもったりして居るので雨がさを持って 二人子供をつれて、奥さんは体のいい女中のような風をして居る。 『新訳源氏』 をか って来る。 水道 何

が悪い。

あしたは雨になりそうだ。

れる。私に真似が出来ない。

集を買ったの 夜 がか りて来た風 で 二 冊になったから送ってあげる。 呂敷に 『リヤ王』 と、 『空知川 の岸辺』 をかえす。 『リヤ王』 は沙翁全

あ の先 生の訳は 矢張り或点に於て意に満たない所が多い。 それかと云って、 久米氏の訳

もなんだかそぐわない気もするが。

八月十二日(土曜)

が、 思って急に荷物をつめたりする。 頃電話をかけると云うこと、毎日毎日のびて居るのであしたの正午頃どうしても行こうと かへ御いでなさる。 を見せて いと手紙で御よこしなさる。 今日午後五 それをなおすと特徴がなくなるから、そのままにしてもよいかと思うが、 かしてくれと云ってよこす。 時頃から瀧田氏が来られると云うことだったが、 瀧田氏 の方は前よりは大変よくなったが、句々の上に不満の点もある 唐紙に夏目さんに少し似た字であった。母上、 独りでせかせかして居ると、 封筒に入れてあて名を書いて置く。 吉田□子氏から電話で写真 急に用事が出来て行かれな 夜父上とどこ 何だか天気 あした八時

八月十三日(日曜)

手で右の手通りの癖をする男と、 かである。 旅情と云うもの、 とうにあ くれる。 雨 上野からつづけてのって居るのは、 いじけた者ばかりである。 は降らな りがとう」と祝ってくれる。 家を出るとき、 か ったけれども天気はあつ苦しく工合が悪か 旅のはかな 久米氏来訪 い情なさが、 薄暗 法科の学生で讚美歌ば い灯かげに影を大きくゆらしながら、 「今度貴女の小説が、 暑いときの三等の長旅はかなり辛 国 しみじみと胸にこたえた。 道、 私丈になってもう周囲はすべて東 かり歌って居た男の印象があざや った。 中央公論 本田 へのるってどうもほ 右の手が の道ちゃんが送って i, 運ば 白 河 なくて左の れて行くと、 頃 にな 北 0) 寒 る

八月十四日(月曜)

ると、 畑でしきりに何かして居る禿頭が見える。 非常に早く起きた。 非常によろこんだ。 まだ露のあるなかを一郎を訪ねる。 種々話の末天竺ぼたんが一本一銭で今日は九銭小遣があると云 草花 のか げにかくれて立って居る私共を見つけ 鳥の小屋の裏を廻って行くと、

う。 た。 でと異って見えて来た。 りで三人並んで床につく暖 にあふれ ろへもか 母上からの二円を遣る。かえりにふり返って見たら包みをあけてうれし笑いをして居 可哀そうに、 て来る。 か れず、 池の 貧乏な情ない生活をして居る。 あの男もあんなうすれ女房を大切に守って居るばっかりで、 周囲に夕方行って見たり、 いしずかな心持であった。 もう田舎らしいのびのびした心持が 馬を洗うのを見たり、 田舎、 祖母及びその他の人々が今ま する。 息子 夜は、 Ď 体中 らこ 久振

八月十五日(火曜)

気分が遺憾なく味われる。 ヤラメルをなめたりして居た。 いやに太った芸者や雛妓が多勢来て、「そーけえ」なんかと云いながら煙草を吸ったりキ 夜 黒地 町 泣 の活 \overline{V} の着物に白地 、たり、 動へ行く。 「まあー」と歎声をもらしたりして居るのを見ると棧敷十八銭の小屋の 売店に居る女で、 の帯が大変ここいらにはめずらしく、 もう幾年前のだか分らない川島武夫の後日物語に大変興奮 非常に私の注意を引いた。大変にうすでな体をし いかにも妾風な女であった。

八月十六日(水曜)

との事、 坪内先生小 又きっと岡田先生と一緒に行らっしゃったのだろう。 此木先生、 石川先生へ出す。 小此木先生は上州の榛名に行っていらっし 坪内先生の所 へは、 やる

見た女のことを書いてあげる。 石川先生の所へは、どうしても通り一ぺんの時候見舞ほかかけない。

の そのあげる人によって書けたりかけなかったりするものだ。 天一 坊」を一 生懸命によんで、 ほんとうに悪智恵たけた男だとか何とか真面目な顔で 祖母や高村の婆が、 手紙でも 何でも、 『読売』

刺戟がなさすぎて、 却って不安な様な心持になって来た。 話し合って居る。

八月十七日(木曜)

見て行かれる心持になりたい。 この頃自分の内 部 の情熱に圧迫される様な苦痛を感じる。早く、 その意味で私は二十六七の年配を希望するのであ 静かな感じですべてを

ゆたかな人に、 久米氏 に対してもお互に静かな友愛で交って行きたいともつくづく思う。 いくらかでもつきあえる機会はありながらつき合わないで居ると云うこと あれ 丈の材の

の専横」 ある安心も感じる。 も辛いけれども、こそっと会ったりしなくなった―― (久米氏の言葉)はどこまで私を苦しめるつもりなのか、 執拗なHは、どこまで私について来るつもりなのか、 -出来なくなった自分の心に対して、 あの人の価値は段々下 あ Ò 人の 「弱者

八月十八日(金曜)

って来る。

がありすぎる。 ntional な要求願望を持って生活して居る人と、自分の間には、どうしても内面的 ようにひっついて来られるのは、ほんとうに苦痛だ、たまらない。下らないことに嫉妬 しかに私にとっては苦痛である。 東京に帰って又、すぐHのあの哀願的な目に見られなければならないと云うことは、た 私を支配しようとしたり、 一致するとか云うことは、考えられもしないことでありながら、 権威のあるようにしようとされると、憎しみを感じる。 あの人の弱々しい好意、 執着、すべての点に於て conve 送り狼の の 隔 l)

八月十九日(土曜

天気が大変暑い。目をさますと、坂本さんと母様が二つよこして下さる。坂本さんは、

て居る。 なくよごれて、 顔をして居た。 ことである。 について心持を書 きたい気がして居るが、どうしても気がまとまらない。 天気 が 小 宿直 曇 種 雨が降る。 いてあげる。 々 ったり雨が降りそうになったりして居るので、 の感じをおこさせた。一つ材料を得たよろこびにうたれた。 の教師がまだ二十一二の紫メリンスの帯をした男だった。 小学校へオルガンをかりに行った。 高嶺さんが、 赤倉からよこしてくれた手紙 昼頃坂本さんへ、 留守番の男が大変気 心持が沈んで、 手紙をもらった とはまる 教室が 非常 静かな裡 で違 面 味 きた に 悪 百 書 つ 11

八月二十日 日 曜

に居るのが苦しかった。

屋信 世界』 る暗示はたしかに与えて居る、 ほど暑くても、 こうやって離れた処へ来て居ると、 学氏 0) 文が 増 刊をよんで見ると、 もう投書家の域を脱した様な体裁で、 さわがしくても、 種々な感に打たれる。 技巧もある程度までは行って居る。けれども女性的な繊細 静かな書斎さえあれば、 東京がほんとによく思われる。 「赤き世紀の人々」を出し 今までとまるで違った顔ぶれ 東京よいところである。 東京が恋し て居た。 で、 或 吉

なりよかった。

ない る。 さ、 空想さはなやかさが幾分きざなと思わせる点もある。 人ではあったけれども、 少女讚美者として種々な意味で働いて居た人だったのにと思う。 私は、 まだ成長しきらないまま逝った人の心を深くかなしむ。 渡辺ゆめとが死んだと書いてあ 誌上 のちっとも知ら

八月二十一日(月曜)

同情する。

来る。 の花」をよむ。 貧乏そうな宣教師風の女達が ので立つ。大したことはなくってよかったが、宿屋が非常にきたなくて、 い思をした。 いよいよ猪苗代湖 びっくりして車をもどして、 お祖 母様の車が、 中止しようとしたが何と云っても御ききなさらずに一汽車おくれた二時半頃 夜具がきたないので、私は羽根ブトンのかさに入ってねる。 へ行くことにする。一重帯や何か買おうと思ったので一足先へ車で行 牛肉屋のかどで、 ——西洋人—— 医者をよばせたりする。 自転車とぶつかって引っくり返ったと知らせて 来て居た。夜ランプの下で、 人だかりがするなかで、 買って来た たまらなかった。 湖の景色はか つら 野

夜中に大地震があって喫驚した。宿の女房が裸体で烏路烏路して居た。

入日の景色と水浴する馬の群、 渚で顔を洗った心持が非常によか った。

八月二十二日(火曜)

が出、 た。 礼に 白いことだと思った。 ンで一人久米氏そっくりの大学生で同じような人を見る。 おやじの様な 雨 小西 が降る。 西瓜とブドーをよこした。 ζ, の風呂に行く。 かにも久米氏を此上ないもののように思って居られる様子が のが居た――に休み、 居てもつまらないので立つことにする。四人で一円六十銭茶代一円やると、 家へ 小供がすき見をするので気が気でなかった。 帰って非常に落付いた安心を得て、 娘が荷を負うて送って来る。 坪内、 千葉、東京の家へと絵葉書を出す。 夜、 停車場わきの茶屋 皆で喋りながら心持よくね 久米氏の母上見え、 ありありと見えて ステ シ 種 油屋の 々 . Э 面 話

八月二十三日(水曜)

こう云う山 雨が降 一体の霧雨に掩われたところに、しょぼしょぼした笠の百姓が歩いて行く。 って居る。 中 · の 淋 しい淋しいところに居るとすっかり心持が滅入ってしまう。 わびしい。 東京の町に居てさえ、どことなく力づよい心持がするのを、 Щ の姿も 朝母様

しく出来て居たのがたまらなく家らしい心持を起させた。

の村にない学士の子をもって、 持って来る。 の所から手紙が来て、 こどものことは安心出来ないと見える。 しなさったので、 立岩夫人はなかなかの利口もの。 すっ かり帰る決心をしてしまった。 国男の夢を見て心配して居るとか鳥の工合が悪いとか云っておよこ 鼻がさも立そうに見える。 有難いことだ。 久米氏夫人の妹らしき人なり。 あんな理智的な母上でも旅先 立岩の夫人見ゆ。 高村 姉妹ともこ 0) 婆 に居る 西 瓜

八月二十四日(木曜)

ざけて居るのを見たら妙に、 たと云う愉快な心持になった。ステーションの雑沓も却って、 て居ると、店の小僧が冷評するように云う。 つしやる って、幹彦さんの、 しいことはなかった。 今日急に東京)母様 の顔を見たときの嬉しい安心した心持は口に云えなかった。 へ帰る。 『舞扇』 横須賀 十一時四十八分の急行だったので、 淋し を買いに、 の海軍病院の兵が居て、傍のきたならしい子に面白そうにふ い心持になってしまった。 万嶽堂によると、 王子あたりに来ると、ほんとうに東京につい 『女の世界』に自分のことが出 少し空いて居たので行ほど苦 汽車のなかでよむようにと思 心持がよく、 私の敷布団が新 風呂場に被居

八月二十五日(金曜

私は、 に 時に「こう」も亦友達を送って来ると云って出て行った。夜十時になっても彼女は らそれが彼等一生の幸福であると思って居ないのは明かでありながら……。 心持をしみじみと彼等の上に深めた。結局のところ二人はどうするのか。 かけなさると夜十時頃こうは家へ一度かえってから又どこかへ行ってしまったことが分る。 て来ぬ。とうとう二人は馳落ちをしたことと分ったのである。 今日急に間宮が脚気だと云って暇をとり、 『科学文芸』 あんまり静かに馳落ちと云うことが出来たに喫驚したと共に、互に弄び合って居る から原稿をもらいに来たそうだ。 九時五十分発の汽車でかえることになると同 夜母上は小田原 互にそうしたか 私の居ない間 へ電話を御 かえ

八月二十六日(土曜)

晩行って居たのだろう。 今日母上日本大学へ電話を御かけなさると、三月から一度も学校へ来ないと云うことだ どうりで、 おそくなろうがどうしようが平気だったと今思いあたる。 私が気のどくだと思ってやった電車の切符はどこへ行くようにつ 活動へでも毎

心持 で操 I) か 今までよりはっきり分った。 強 ったの も つら か 湧 つ か。 ħ た 1 7 のだろう。 7 来た。 居た運命 「人間はだましやすいもんだ」と彼は微笑しただろうが内心 夜は、 今になると、 の皮肉を感じ、 死 の勝利」 あの女と、 自分自身の位置、 を一寸見た。 四角ばった辞儀をする間宮との間 ジオルジチの心持が、 態度に対するたまらな あ苦 或意味に於て、 痛 **,** 1 は、 不 どこか 愉 快 かな な

八月二十七日(日曜

買って来た。 りないで、 致で書けそうである。 今日はしきりに製作欲が動いて「彼方に遠く」 起きるとすぐいやな心持を味わなければならなかった。 かけて行く。 入れては川へ流した「ころり」の惨酷な死方は今ものがれられない。 午前· 中、 皆が 父上 ゆうべ赤坊があんまり泣きたてたので家中の者の神経がすっか 暑 せか い、 から来た電報為替をとりながら、 せかして居るのを見ると、 蝉がしきりになく、 今月中には書きあげたい。 H が いかにも会社員めい を書き出す。 自分ばか 古本みたいな『あらくれ』 コレラが段々拡がって来る。 夜は割合に涼 り落付いて居る訳にも行 メランコリー た風をし しい。 て芝の に沈 を四十八銭で 家中 り鋭く 昔モッコに んだ様な か 法 0 手が足 なって、 事 な 筆 出

八月二十八日(月曜)

とを信じられる。 淋しい苦し ら見ると、 耳元で響いて一晩中坐ったまんまで明したと云う。 こと、又その人が非常に信用して居た医者が丁度その悪いころ北海道に居て、 分と暑い。 今朝、 英男がは 或る霊感が距離 大瀧氏· い気がしてどうしても眠られなく、夫人には聞えない寺の鐘の音は 坂本さんから Sunflower の大変好い絵葉書を下さる。 いた。 夫人来訪、 母様初め皆が、 の遠近に拘らずエーテルの震動によって、 姉が死んだので、 時節柄なので、 毎夜死んだ姿や声をきいて眠られな 乃木大将が愛子の幻を見られたことか よけい好い心持がしなかった。 伝えられると云うこ 幽霊は人によって 或夜非常に しきりに いとの 随

八月二十九日(火曜

無いと断言出来るものではない。

らしい涼しさが立ち迷って居る。 く早く起きたので午前中にも、 今日あたり 『中公』 の予告が出るだろうと思って居たのにまだだった。 書くことが出来た。 日はよく照って居るけれどどうやら秋 朝珍らし

たまらなく不安になる。 けがついて、 もないそうだが一寸寒気がしたりしたので、又一昨年のようになりはしまいかと思うと、 もまあ安積に居るときでなくてどの位よかったか分らない。 から青い木の葉が妙にキラキラして居る。コレラが盛なのですっかり気になって来る。 午後から何だか気分が悪くてたまらない。どうしたのかと思って床に居ると、急にはき もどしてしまった。 しなければならないことはうんとある。 胸の底から出されるような涙にかすんだ目を透して、 夜細井氏に見てもらう。 何で 窓

八月三十日(水曜)

日ねてしまう。 夕刊に 『中央公論』の予告が出て居たのを国男が見つけてくれる。

八月三十一日(木曜)

早速手紙をつけなければならないところへ書いて送った。漸々起きたばかりにかなり頭も ない男から手紙をくれた。本のことについてだ。中公に電話をかけて、 らうことと三十部送って下さるようにとたのむ。二時一寸すぎて車夫に持たせて下さる。 今日父上御帰京好い工合に海も平らだったそうで何よりだった。朝、どこの人だか分ら 原稿をかえしても

りがたかった。この一日ほど私の一生にとって意味あるときは又とあるまい。 対する感謝と、 体もつかったので苦しかったけれども、 何とも云えないうれしさがこみあげて来た。 三十冊の本がつまれたときに、 ほんとうにうれしか 自分の頭と能力に つた。 あ

私の第二の誕生日であり、命名の日である。

[八月の感想]

私の第二の誕生の月と私は呼びたい。

この月の

()

かに意味深く尊いことであろう。

私の希望と、

歓喜と、不安、責任の感が、

か。 遺憾も感じないほどこの月は尊いものである。 のこりなく盛りあげられたのはこの月なのである。 私はこの真に私の生活の始まった月が又全生活の幕の閉じられる月たらしめて、 私が死ぬときは八月の中ではあるま 何の

〔八月中の重要なる出来事〕

太陽の栄ゆる八月。

私の生命

の燃え立った八月。

二日 千葉先生より大変長く立派なお手紙をいただいた。

六日 坪内先生へ行く。 日に会いたいと云って来る。 種々のお話を伺い、 斉藤さんと云う人から電話がかかって来たそう 中央公論から電話で十日までに見て置いて、

だ。

八日 千葉先生へ行く。坂本氏から手紙。

十二日 瀧田氏から手紙が来る。 来られない、 明日午前八時から八時半までの間に社に

電話をかけてもらい来てもらうかもしれないと云って来る。 同じ日小寺氏から

電話でお目出とうとひやかし。

十二目 国民新聞』 の吉田□子氏から電話、 写真を送る。

あのまま、 少し瀧田さんが手を入れてなおして、そのまま出すときまり、 正午

十五分すぎ安積へ出発。

二十七日 二十一日 猪苗代行、 「彼方に遠く」起稿、 二十四日帰京 三十日夕刊に予告出、三十一日発行、 二十五日—二日間宮、 こう駆落ちす。 諸々へ送る。

九月一日(金曜)

坂本氏、 安藤氏、 坪内先生から手紙をいただく中に石井きぬ子と云う大正二年度の卒業

が出 夜は、 に思われ けて見よう。 書いてあるが、どうもうまく出来るかが疑問のようである。 一来な 大変に久しぶりに涼 () ると、 それを自分は尊くも亦一方には恐ろしくも思う。 「貧しき人々の群」よりはどんなにしても上手に書かなければならないよう 幾分気がおくれると云おうか気が張ると云おうか、 しく虫の声も落着いた心持できかれる。 けれどもこれから又書きつづ 体の工合は略よ かるがると書きぱな 「彼方に遠く」 は少し

九月二日(土曜

うな心持がする。 なれば、 氏が来て、 たところでそう大してうれしくもないけれども長い間欲しい欲しいと思いながら買えない 央公論から留守のうち、 小 榛名は大変好いところだと云う話だからどうかして行って見たい。 柳八重子と云う女名の男らしい人、古市氏、 夏行って居られる。 大変ほめて居てくれた。 少し考えることがあったので、 百五十円持って来てあった。 古市氏の性格が分らなかったが、今度の手紙で略分ったよ 夕方から坪内先生、 長い手紙を出して置く。 堺先生、 小此木先生は大変よろこんで下さっ 小此木先生へ 小寺氏から電話。 車で行って来る。 弟達が大きくでも 百五 朝、 十円 田 村松魚 中

で居たのが少しは自由に買えると思うとそれが一番たのしみだ。

九月三日(日曜)

はあるまいと思って居ると、夜中の二時頃、 午後になってから母上少し工合が悪いようだなどと云って被居っしったが大したことで 急に胃痙攣だと云うので、大さわぎをした。

それでも大したことでなくてよかった。

が来年になって見ると、興味あることになる。 夜になっても日記一つ書けない。 それでもどうやらこなして三度の御飯も止りなく食べさせたかわりにつかれてしまった。 しゃる。 日何も食べずに被居っしゃる。 床のわきで退屈まぎれに百五十円の使道を考えて、 働くとどうしても気が落付かない。 お雪も工合が悪いと云って来ないので大騒動になる。 直に決定した。下らない事だ 父上も一日家 に被居

50貯 15御 馳走 7 人 2, 下の者へ 6円千葉小此木先生 9. brothers

九月四日(月曜)

備

50本

pen をか 夜 『新 い国男へ三円道男へ二円五十銭やる。 訳源氏』 と、 『三人』ゴーリキーを買って来る。 英男へ一円五十銭の

女の柔味はなくてもべたべたしないなら好いけれど却って。

の姿ば、 ない り得る。 間宮から母上を悪人に仕ようとする手紙を父上によこした。 とか かりを見出せた。 の程度をこえて、 人の心理は恐ろしいものである。 罪に混乱しそれを掩おうとする人間のあわれな、 カメレオンよりも変化し醜くな 読んで見ると怒るとか怒ら しどろもどろ

中央公論から原稿を返して来る。 上にケシのカットなどかいてあるのが面白く思われる。

九月五日(火曜)

まる、 ない。 の亡友で 内先生の めて下さったそうで、 のって居る写真はよくとれて居る。 母上まだ床について被居 それ 所に どうぞしてうんと気張ったものが書いて見たいと思わずには居られない。 『新小説』 から正月号にまた百枚か百五十枚のものを書いてくれとのことである。 あが って来ようと思う。 発売禁止 再版を千部すり、 しやる。 瀧田氏来訪、 目が窪んだので大変凄くなって来た。 これ 第三版になりそうだとのこと、 からの努力はうれしい。 木下杢太郎氏など、 涼しくはな 内田 うれ 魯 『時事新 しくな 庵 り、 氏が 谷崎氏 大変ほ 報 気は 明 11 でも 日 坪

九月六日(水曜)

此木先生へ葉書で御ねがいして置く。 直そうな男である。 ことわることにする。 「中公」 つかえるのでやめ、 甫守氏 機川 を送り高松氏、 氏より来信、 何か云うたんびに頭を下げ下げするので、 小杉と云う書生が目見えに来た。体の大きい、どっちかと云えば正 午後から坪内先生のところへあがろうとしたが 大瀧氏より電話、 黒田朋信氏より 母上珍らしく食堂で御食事をなさる。 婦女新聞社から英婦人の名を教えて来た 『趣味の友』への原稿をもとめられるけれども、 私はいやになる。 夕飯 ゆうべよなか 0) 仕たくにさ 西脇 から小 氏

書きたい。

千葉先生へなかなか

上れ

な

いから手紙をあげようかとも思う。

近くなってから考えた 文章も洗練し、 暇があるのだから三度位なおすつもりでやるのだ。 「鈍色の夢」 の筋書を母上にお見せする。どうかしてよく書きたい。 アッと云わせるものが

九月七日(木曜

夜は る。 真をくれと云ってくる。 れて居るような庭になった。亡き祖父は、どんな心持がされるだろう。 とわりをして来ようと云って居る。 鵬 向島 女的 心氏 かなり涼しい。 坪内先生の方へあがっておたのみして来ると云うので、 石井きぬ氏より来信、 へ車で行って来る。 なすべての へことわ りの電話をかけると、それなら十一月の特別号へ出してくれと云って来 風になってしまわれる。 「鈍色の夢」はこまかいプランをたてて見よう。 外国に行ったりするにはたのんで置い 何とか云う人が Japanese magazine の上にのせるのだか 先の風雅な趣は一寸もない。 ほんとうにどうにかして、 教育と周囲 の状態はおそろしいものである。 あの伯父の性格が遺憾なく表わ 坪内先生の方へあが 正月にはなお好 た方もよかろう、 まり子氏は (1 などと思 つて 0) が書き :ら写 おこ

九月八日(金曜)

ろし 覚される。 には 居られな ズーッと体をまげて国男の顔をのぞき込んで、 ライラして苦しんで居た。 けてしまった。それが却って心持がよくて、 いに行って来る。 婦 いか 人雑 かけないものだ。パナマ帽の□のことを考えると妙に皮肉な滑稽を感じて笑わずには たい手紙をよこした。 誌社から本を送ってよこした。 こんな工合では、 心持が大変楽になった。 あまり暑さがきびしいので、 夜国男が漢字をさらって居るのに邪魔をすると赤坊を叱ったら、 正月に書けるかなどとも不安になって来た。 久米氏に あんまり毎日暑いので体が悪くなって来たことが自 『新思潮』半年分を送り、 「□□□生」と云うすさまじい名の人から、 夜は 様子を見て居る。 脳の中枢が痛んだような気がする。 「金剛草」をよんで見る。 あんまりみじめな 午前中東京堂へ本を買 伊東忠太氏へ なかな 妙にイ か ので泣 おそ 私 共

九月九日(土曜)

『中公』

を送った。

涙がこぼれそうになった。 鈍色 の 夢 の参考にもと思って、 「その前夜」の中の女性とこの中の女性、 「処女地」を読んだ。そしてすっかり感服させられた。 ツルゲーネフの書く

がうかんで来た。 女性 潔に云わせる言葉の多くが私 たしてどこまで真率なものであろうかと云うような疑問や運命とか生 て行く恋に対して、 層深 有難 に V) 何と云う尊い 或方 いことだ。 何に 向 強 自分 妙な心持にならずには居られなかった。 つ て動 い目覚めた所を持って居るだろう。 の恋、 いて行くようなのを感じる。 の頭に一 いつも自分に只苦笑をさせるばか 杯になった。 「処女地」 私は非常に厳粛な心持になって涙 非常に多くのためになる点を得 私自身 を読 りなあとを残 むと、 の又の件と仕様 死 だ対 自 分 ずる 0) しては消 生 活は 心 と思う。 持 は え

九月十日(日曜

が 内先 す よる。 屋 から、 来 午後から三越へ写真をうつしに行く。 生に る。 口人 久米氏から手紙が母上に来る。 あげ 所 オランダ製の花瓶を買って来た。 謂 の女は、 るものを買うのが 好 1 人である。 只ものでは 感じはよくな ない。 目的であったがとうとう見つからなかった。 来月の 藤井氏の茶托でほ 丸善により 色と形とよくととのったものだ。 い顔をして居る。 『新思潮』 『我輩は猫である』 で批評をしてくれるらしい。 しい どつ のが か梟を連想する。 あった。 を買い、 父上と一 三十五 成 并先 琅玕 一銭は 緒 古道 生 邦枝 洞に に 0) や 具 姉 坪

完二氏から写真と手紙をくれる。今日とったのとはまるで異って居るのでそのときの気分 や何かと云うものは面白いものだと思う。 敦子氏より葉書をくれた。

描かれて居る。どうにかして好いのが書きたいと思う。 鈍色の夢」はどうしてもツルゲネフの影響をうけるらしい。とくに潔の形が非常 『美術週報』 に好 い批評が に頭に 出て居

九月十一日(月曜)

からして神官ではない。 ろがある。今ほど心持よくないものである。 とを皮肉に茶化して居るところにあきを感じさせられる。とにかくまだある拘泥したとこ くなって居る。 って、三年目になって居ると思うと早いものだ。 今日は華子の三年祭である。考えて見ると早いものだ。いつとはなし、 神官は余り力がありすぎる。或る意味に於ては相場師の様な人だもんで、位置があやう 迷亭の駄語にはあきも来るし、又あんまり皮相すぎるようでもある。すべてのこ 神官は安積の宮本さんの様な人でなければ神官はつとまらない。 「我輩は猫」を読む。どうも今の夏目さんの作品から見るとまる お雪は何と云ってもああ云う稼業をして来た 妙に種々の追憶も湧いて来る。 時はすぎ日はた あ Ò 眼鏡

山

尾が

ついそこで、

間宮に会ったと云う。

あれもつまりは馬鹿な男と云うのだ。

丈あ って異性に対すると、 非常に passionate になって来る。

九月十二日(火曜)

せた。 や動作をして居られる。 って、 私の様に 田村俊子 青山 ずいぶ いろい の夫君松魚氏が来る。 まっ平な帯のしめようや形つきをして居る者が居ない。 母上と英男と行く。 ろ話をして来る。 んおひっぴで、 如来氏の笑うのは、 安い香水のにおいが臭かった。 電車の中に居る女を見ると、 あ 何だか活気のない、 の人もこのごろはほんとうによくなって来た。 喉で吹子をふくようで不愉快だ。 衰えたる何々とか云いたいような言葉 皆後姿だけ美人が多いの 朝の内坂本さんのところへ行 かえりに芸者がの 夜関 り合わ に驚く。 如

九月十三日(水曜)

な 紙 V に 静 ものである。 か 岡 か 0) れ 何とか云う人から手紙で廻覧雑誌に何か出して呉れと云って来る。 た一寸した手紙ですぐそれに投稿する者があると思う心持は自分には想 坪内先生へは二十円の丸善の切手をあげることになり母上行って下さる。 只一枚 像 \mathcal{O} 原稿 出 来

な 四 十円は自分で出す。 V ため、 学校より教師 などであったそうだ。 浮世絵日本古代 について英語を学ぶこと、 坪内先生の御話の要点、 の美術を相互に知 **五**、 一、外国へは二年以上居ない方が好 明後日次の原稿 り歴史の研究、 三、 の箇条書きを持って来る 漢文は本でよむこと、 い忘られ

人生と、 な心持になった。 夜、 清野 生物学口 暢 郎 ドス 氏より来信、 |的倫理観をよむ。 トイエ フスキーをよんで見ろとまで云ってある。 あんまり真率に親切に書いて下さったので、 千葉先生の経験的 すまな いよう

九月十四日(木曜)

明日より無名会

まける。 の都は私の心持にはうつらない。 の霊泉由 7 午後院展を見に行く。 特色を見出せた。 来は分らなかったが西洋画で、 盆おどりは女性的、 乳しぼる家は、 七夕は好い胚種を持って居るから一息の所、 朝ぎり、 彫刻では泣く子の顔を一刀ぼりにして、 砂丘、 うまくはないが、 今関啓司氏の風景には、 南島はよかった。 色調に共鳴を感じる。 樗牛会の賞を得 日本 貧者の一燈は題名に 画 の影響をうけたら 筋肉の moveme 業火と寂光 だ川 端 龍子

少な nt を想像させられ、 ょ の夢」を少し考えて見 か つ いらし た。 あの姿が忘られ 父様 鐘はあ の御なか な んまり技巧的すぎる。 \ \ \ の工合が悪くて、 春風 點 たい とう には、 機嫌を悪くして被居っしゃる。 ああ云うのはこのまない。 超然としたところがあって 眼 夜は は **,** , や 非 みげが 「鈍色

九月十五日(金曜)

明日午後十二時半までに小此木先生

る。 よい で何 さわ だか虚無的でいけないから 日出新聞』 少し 夜は 1も出来ないような気がする。 ものである。 って居るそうだ。 は考えもまとめて置きたいと思うので何だか落付けない、 御返事をあげたいと思ったけれども、 何と云っても涼しくなって来た。 の石井幸平と云う人が来たが、 その 千葉、 極度 の謙譲は、 「彼方に遠く」としようかしらんとも思う。 坪 内両先生、 聖フランシスの 私にはよく分らないけれどもあるなぐさめは 古市氏より手紙、 「鈍色の夢」に関して少し考える。 会わ 十七日午前に坪内先生のところへあが なかった。 「小さき花」を少しよむ。 又雨が上ってあつくな すりつけた眉 題も 「鈍色の夢」 をしきり 非常に 千葉先生 いったの 得ら 心持 に指で は何 る の 0) の

九月十六日(土曜)明日午前坪内先生

私は げに病人を手中にあつかうにならされた冷淡さがあらわれて居る。 目をつかうのも彼女の職業のさせることだろう。 日などは、 らないとおっしゃる。 行人』 て下さる。 小 一種 此 順天堂の藤谷氏に会い薬をもらい中西屋で本を買ってかえる。 木先生へ母上と一緒に行って、 と の恥辱を感じてしまった。 実にたまらない。 『罪と罰』 どうとでも早く行くのは大変よい。 先生のことや、 を買って来る。 そんな人達の居るなかに交って待って居る間 青木に会う。 学校のことや、 本のことを御相談して来る。 『行人』 の装幀はかなり好い。 学校をやめてもその方がどの 何だか 如何にも看護婦長らしい物やさしさの 外国行のことを御相談する。 いやな心持がしな 皮膚科 母上は かなり無遠慮にさぐる 松岡 : の 六 いでもなかった。 は実につら 〇六 位 へ行 好 、の注射 皆賛成 か 11 か か か 分 つ

九月十七日(日曜)

ス史をかして下さる。 坪 . 内 先 生に あが る。 見ていただきこまかい御注意をうかがう。 「鈍色の夢」 の筋に関しての御意見 歴史などの話も出てグリ

だ。 非常にアンビシャスなもので、 勇気をもってやって見れば立派に出来れば大したもの

孝の 庸 の助を現在的に出すこと、浩の対照として、 進 の 履歴をもっとよくして、 浩に遺伝的好い気持のある様にすること。 お咲を働かせ、 おらくをいか せる。

四 浩の境遇よりうけたる精神上の変化並びに異性に対しての心持を出すこと。

莊, 主要人物事件以外をなるたけぼかすこと。

めずらしくHが来る。

がどうしてもしっくりしなかった。 あのまんま□□帯でてらされて行うだ。

相変らず dull な顔をして、

気力のないこと甚しい。

何だか心持

九月十八日(月曜)

明日午後七時まで小此木先生

はあんまりみっともなさすぎて、遺伝的に好い家だなどとはどうしても思われないのであ うである。 しても明かに目に浮んで来ぬので、 『死人の家』と、 Cranford を少しよんで、 『死後は如何』を云いつけてやる。 主な人物をこまかく書いて見る。 気になって居る。どこかへ行って見よう。 あついので買いに行くのも、 お咲 の容貌がどう モデル おっく の顔

る。 る。 どこかに自我 又何んぼ芝居が見たくてもコレラ奴にとってころされるのも下さらない。 夜芝居の話や何かが出る。 似て 夕方直行さんが来る。 居る ので非常に不愉快だった。 のはっきりしないところがありそうだ。どっしりしたところがな 大変ふけて見える。 無名会の 髪の毛は好い。 「罪と罰」もコレラがこわくて行けそうにもない。 体つきが松岡さんに似て居て、 頭もかなり好いらし ٧V けれ いと思わ 口の表情が ども、 'n

九月十九日(火曜

かが やと思って居るかしれない。直行さんがかえる。「死人の家」を少しよむ。心を動 るには、 仰云しゃる。 す者の心が分る。どうしてもロシアには大きいところがある。偉大になるべき分子が非常 小 此木 もう少し って来る。 ああ 先生へ行き、 では出来ない。 飄然とした、ひょうぜん 『ユーモア十篇』を持って来る。 あの笞うたれることをおそれるあまり、その前夜に、それ以上の罪をお ボイド先生にでもきいて見るけれどもいそがしいからどうだか分らないと 種々学校の話や、書いたもの、これから書くものについて御話をう マークトゥエンはあんな訳しようをされて、どんなに恨めし あくぬけたところがなければいけない。心から人を笑わせ 訳しようが俗なのでさほど興味も持ち得な がされ

に多く蔵されて居る。

やがて文明の先達者となる北方の民の現在の潜勢力に畏怖

九月二十日(水曜)

敷へ 持って来て、 毎日 裏で仕事をして居る大工が真裸体で居る。このむしむしするのに気の毒なことだ。 ってしまった。 夏目さん 塵が [あつ \ <u>`</u> 一杯落ちて来るので、 英男の机をかりる。 随分残暑の長いことだ。けれど流石に夜になると好心持になって来る。 「行人」を読む。 頭が疲れた上に興奮したので、床に入ってからも少し長い間眠 まだ少しのこって居るけれども二時すぎまで一生懸命に 勉強部屋の本箱に入りきれない□だけ子供達の部屋わきに 如来氏大理石にほる字を書いて来られた。 れ な 下の座 か 屋 った。 な 根

九月二十一日(木曜)

どくだった。 ときから今までこの位面白いものはよまなかった。なかなか感情がこまかい、 昨夜十二時すぎてから長く本を読んで居たので今朝はいつもよりすっかりおそく起きた。 北原白秋氏が私にと来られたのを、 Cranford を読む。 なかなかよく書いてある。ツルゲネフの散文詩を読 御帰ししてしまったと云う話をきく。 ユーモラス おきの

風が吹 なかった。 やなのでやめることにする。 で女らしいつつましやかさのある文である。 手紙を出す。 ĺ١ て来たので、 『時 事新報』 「死人の家」をよむ。どうかして頭が少しつかれて居てさほど感興がのら しきりにどこかへ行って見たくなって来た。 の写真部から先とった写真を送って来てくれた。 段々私の頭に大変好いときになって来た。 非常に暑い。けれども五時頃になると涼し けれども出 河本さんのところ てか らが

九月二十二日(金曜

管証 らな 人に会った。 本として出すのもわるくはないがあまり小さくもあり又雑誌に出したばか ってしなければならないときに、 北原氏より書面で「貧しき人々の群」を単行本とすることについて云って来る。 マー に印をおしによる。 クトゥエンの話など出た。 けれどもまあ坪内先生にも伺って見てと行く。行きに区役所へ水道の 概して実際的と云うべき人だろう。 自己をまげ従順にならされて居る女は、 自分も気が進まず、 出来なくなるらしい。 帰りの電車で、 必要も感じないなら止めたがよかろうとのこ まるで呉服屋の云うなりな風をした婦 身のまわりのように、 小田切の直行氏夜来訪、 りな 自分が主にな メー ので 種 奇麗な 気が トル 々のこ 保 の

九月二十三日(土曜

好い、 やまされてしかたがない。 きぬ子氏に会う。 ど性質が変って来た。 て又訳して十二時ねた。 れども随分皮肉な人らしい。 大変工合が悪そうだった。 小 雨が Cranford を少しよむ。 が 九谷はどこと云うことなしに俗なものだ。 して居る。 おだやかな美をもって居る人だった。 三越の彩壺会へ行った。 悪くなった。 時候 読売の下妻つまとか云う人が来て、 どうかして静かな心持でねつきたいものだ。 八時頃からねむくなってしまったので一息ねて、 のかわれ あのあごの山羊髭が皮肉なのだ。 来る り目のどうしたのか、このごろは、 のが 不愉快なようだ。 女房をなくした車屋にのって行ったがよっぽ 夜 parents の間に小さい quarrel 堀氏に会う。 柿右衛門鍋島、 写真をかりて行った。 岡 田 信 機械学士だそうだけ 泣きたい様だ。 よるになると、 郎氏に先ず会う。 十時頃 古伊万里は があ 起き 石井 な

九月二十四日(日曜)

口氏のジョージ・ 昨 $\dot{\exists}$ () () つづきの ムーアに関して或る意味に於て遊蕩文学を讃賞して居られる。 雨がまだ降って居る。 Cranford をよむ。 『読売』 の日曜附録 にヨネ野 若し若さ

先生も副牧師とかになって地方へ行ったそうである。 先生に会う。 ことをきめて来る。 は心持よくよまれた。 と云うのである。 をとりもどし、 母上と行く。 話によれば関先生は結婚して家をもたれ出目金だなんかと云って居た久保田 佐藤氏夫人に会い帰りに小此木氏へ行き、 生活の悲哀倦怠をとりもどすことが出来れば、 一方の真理である。 大変に涼しい、 彼方の歌に表現される気分は、 もう秋らしくなって来た。 全然肯定することは出来ない。 僅かの間にいろんな風になる。 散文でもかなりに出 あしたボイド先生のところへ行く 小此木先生のところで富沢 遊蕩文学もいいではな 牧水氏の て居る。 立 三越 秋雑記」 夜は ٧Ì か

〇九月二十五日 (月曜)

涼しく

寒いほどであった。

時半 で買いに行く 白 い可愛い から独りの会話をしてもらうことになった。ウーレーは、早口な幾分遠慮をして居る マリア館 着物に黒いリボンのバンドが美くしかった。 人である。皆感じの好い人ばかりだ。The prisoner of Zenda を読むと云うの へ行く。 中西まで行ったがなくて、ストリンドベルイの『痴人の懺悔』を買って ミスボイドは学校で見るより、 家で見た方がどれほど好いか分らな 別にこまりもしなかった。 金曜

来た。 誌をのぞいたほかのを皆御返しする。 のだと云うことで、 ってひっくり返ったと云うので、 さほど面白くもなかった。 母様から小言を云われて被居しゃった。 家中大さわぎをし、 訳が悪いのだろう。 御祖母上様が家へいらっしゃるとき門に車がぶ 夜千葉先生へ御手紙をかき文科会雑 父様は門を早くなおさないから悪 Prisoner of Zenda を少しよむ。 うか

九月二十六日(火曜

かな

り面白いものだ。

明日小此木先生、四時より

人の顔 若い子供らしさのある調子であった。リネンのよく洗いたてた着物が、 重苦 しすぎて居る 『お光壮吉』 十一時· いような肉感的だとも云える顔立ちであったが、声と言葉は、 の表情は大変千葉先生によく似て居て何となしうれしかった。 かえ 一少し前に聖マリア館へ行き一時間 りに白山のところで、 ので体がぎこちなかろうと云うような感じを与えられた。 (小剣氏)を買って来る。 未明さんの『底の社会へ』と、 上司氏の皮肉はお光壮吉時代にはまだ、 して来る。 又かなり暑くなった。 『硝子戸の ほ、 どっちかと云えば、 電車 あ か んま のどの人より、 タッドと云う で幸田さんに 中より』 りちゃんと さのみ遊

あの方の顔の恰好のように世の中を見て行きなさる方だろう。 ところが ンティッ んで居ると云う気を起させない。 ·ある。 ク派の一 「硝子戸の中より」はまだよまない。 種の気分もみなぎって居るところがわ 未明氏はいつよんでも同じ様な色調ではあるが、 ほんとうに未明さん かる。 上 司氏よりたしかに正直に、 のをよむ とロ 真率 な

九月二十七日(水曜

来た。 罪人をつかまえてからは私にはどうでもよい。 演説をするのだそうだ。 して居るところが多い様に見うけた。 うと云ってくれたそうである。 子大学と、 しになった。 体 一本の手拭、 の工合が悪 私と同年だそうで、 堺先生のところへ行って下さる。 『冒険世界』 1 繩から罪人を見出そうとするその推理的な探究が私に興味を感じさせる。 ので小此木先生はおことわりにして、一日家へ引っこんで居た。 私位の年で、 頭はなかなか立派に出来て居るらしいが悪く世間を知り、 の探偵号をよんで見たがなかなか探偵も興味があるらし 堺先生から夜電話で、 貞操問題が実際にふれて論ぜられるかどうかは疑問 来月の八日に和彌楽堂で、 学校では出来るだけの便宜ははからってやろ 夕方になって、 わざわざ来てくれてと云っておよこ 河村明子と云う人が会いに 道徳としての貞操と云う 母上女 自負 仕

だ。

九月二十八日(木曜)

明日一時半より会話

明日美音会

が洋行したとてしなくたてあの人にはどうでもあるまいに、やんやと云われてはたまらな いてと云って、いろんなことをきいて来る。 大変寒くなって私の頭はよほど工合がよくなった。 千葉先生からお葉書、 『女の世界』 高嶺氏より手紙来。 から結婚号を出すにつ 私

九月二十九日(金曜)

いと云う感じがする。

け打ちこめないところが見えた。席の私の目前に、にきびだらけなお嬢さんが気どった様 なかった。 いことにさまたげられて居るようで思い切ってうたえなかった。どうしてもその芸にだ 久し振りで美音会へ行って見る。 常盤津で並んだ女の中に一人目立って美しい女が居たが何だか、その顔 実に種々な種類の人が居る。 何だかそんなに面白くは の美く

その尊い つらの様 おじぎをしなければならなかった。 子をしてしゃれこんで居るのを見たら滑稽になった。 い心持が悪く高められてしまうものかと思うと、 お人 に結って茶色のリボンをズーッと巻きつけて、古びた着物をつけ、どう見ても大 の前に、 手をついて、 私共がそうするのをだまって見て居るほど人も人間ら しかも皆がよごれたままの草履でふむところに 自分のことがかえり見られた。 ボックスに佐藤進氏が居て、 頭をか 座って 私共は、

九月三十日(土曜

阪あたりの女優のような人が居た。

ほ らいまでこぎつけて居るかと云うのを見に行ったようなものだ。 見えずまだしぐさも、 会った。 々が見えた。 でよんで居たので、どうせああは行かないことを承知して、久米さんではな 「アンナ・カレニナ」が今日限りなので、どうにかして見たいと思い急に出かける。 か の女よりは好いのは勿論だけれども、どうしてもとにかく、 大変可愛らしいと云っていい心持の失われずにある人だ。 寺戸氏に会う。すっかり大人みたいでおかしかった。 音調も平坦だと云うことをまぬがれない。 小川未明氏やその他の人 カレニンも、 ロシアの上流の婦 品 すま子のアンナはまま |||0) 何とか云う人に いが、 私 の解して どの 人とは 原作

私 のではな 居たような男ではなかった。 ったようだった。 輪をかけたようなちびで太ったのが、 か つ た。 読むもので、 背景でもなんでもみんな貧弱で、 そのほかの女と来たらもうお話にも何もなったも 見るものではないとつくづく思った。 洋装で出て来るのだから、 ほんとうに理解して居る人も又 とうてい見ら やはりまだ日本はあ のでは 少な た な か

[九月の感想]

れを芝居にするだけの腕のない

、のは

勿論、

心の準備がない。

我々も。

だ。 では 種々な意味 あったれど、 で私には尊い一 心と体は、 月であった。 三月ほど前からたまって居た疲れを休めにいそが 外からの刺戟は勿論生れて始めてな位強 し か つ 1 有様 た の

心持が快くひきしめられて行く。それにつれて、こないだ中からかるく起って来て居た種 々 、な疑問 漸 々秋らしくなって来たこのごろ残暑がきびしかったので長い暑さに幾分つかれきった や何 .かが一層はっきり具体的になって来たような感じも得て居る。

のことを思うとたまらなくうれしくなる。 正 戸の も Ō 0) 構想やなにかで、 下旬はかなり頭をつかった。 けれどもこれから三月の間

れないことばかりのぞむ。 ともよろこびはする。 論失望は そう云う種類 書くことの出来ることを思う。 たるべき態度心の準備が具わって居るかと云うことである。 夜は長くなる。 しな い。 の内省にふけると、 火は美くしくなり、 努力をしようとする決心はどこまでもあり、 けれども、これがそうであればあるほど私は、 けれども、 自分は小さい可哀そうな自分を見出すばかりで 頭は透明になって来る。 私の絶えざる恐れ、 冷やかな夕風 不安は、 少し寒い位の晩静かに考え、 相当にみとめられて居るこ 自分の真率さの失わ 自分に にふ か <u>.</u> ある。 れ の芸術家 ながら、 勿

〔九月中の重要なる出来事〕

二日 中央公論より百五十円持って来た。

四 日 時 事新報からとして邦枝完二氏来訪写真をとって行く。

五日

今日の

『時事』にのって居る。

瀧田氏来訪自分のが大変に評判よきよし。

中央公論』は、千部再版し、 又三版になりそうだとのこと。

正 月号への百-―百五十枚をたのまれ

六日 『趣味の友』の原稿をたのまれるが断ることにした。

十日 三越へ写真をとりに行き Japan magazine へ送る。

十三日 華子の三年祭を与行す。

十七日 正月号への作品の準備に着手。

二十一日 オランダ書房より単行本にとの話ありことわる。

二十五日 Miss Boyd のところへ行きはじめる。

二十九日

美音会

二十三目

読売の下妻つまと云う記者が来た。

三十日 帝劇へ行き、 「アンナ・カレニナ」を見て来る。

十月一日 (日曜)

英作文宿題アリ。

居るそうだ、そうすれば、ある時期が来るとお互に或る不満を感じはじめて来るのは定で するのだそうだ。どことはなし幸福らしく見えては居たけれども、 徳岡 結婚したら却って死期を早めるようなものだ。 の道っちゃんが来る。髪を長くしたりしてすっかり旦那ぶって居る。二十日に結婚 妻になる人は二十で体が丈夫で肥って あんなにつかれ て弱

ろ H ある。 は 私共は人間の弱点をのこりなく持って居ると同時に強味もすっかり持って居る。 どうにも出来 な の来な つも私の衷心から去りはしない。 それに前から恋仲であったらしいから、 私は V 心持は私によく分る。 又新らしい芝居の開場を待って居るような気がする。 なかった。 月曜 の英作文も出来上らず、 気の毒でもあり、 あとの失望は苦悶はかなり大きなものに違 又私としては非常に楽な感じがする。 たまらなくなってしまった。 今日は 一日気が沈んで 故に苦痛

十月二日 (月曜)

まつおかへ三十円かす

漸 を書き出したいが出が生れない。聖マリアへ来る人も皆大抵は大人になったように、一面 文房堂によりペンとゴムを買って来る。陰気に雨が降って居る。どうかして「彼方に遠く」 になって一時間だけして来る。 を床につこうとしたら赤坊が泣き出した。とうとう四時近くまで起きてしまったので、 昨夜十一時ごろまで作文にかかって居たが一寸も思ったようには出来なかった。 に気分が悪かった。 鼻の先が赤くうるんで、眼のふちが黒くなって居る。 かえりに中西へより、 和英とフレーズの辞書を買って来る。 陰気な心持 そして

なりたいものだと思う。このごろ着て居る紺無地のネルは大変落付いた感じを与えて好い から云えば、 いた感じを人もうけ、 しきりに飾りたてたがって居る人達ばかりなので、 自分も与えられる。 あんなに円く座って髪をなおしこをする心持に 私はここでも又異分子め

十月三日(火曜)

着物だ。

母上の様な方でさえ夫に対しては気分の悪いとか、疲れて居るとか云うことを幾分誇張 て見せるかたむきがある。そこが女の美のあるところではあろうが、Cranford をよみ をはさむなり何なり甲斐甲斐しくあった方がすべてそのときの情景と調和するものである。 風情を美くしく見せようとするがそれは、強く生活の出来ない弱点だ。 かりの夕立のようである。こう云うときに、女がとくに困ったらしい。 りにならない。 「彼方に遠く」を書き出そうとして居るが、どうも最初の書き出しがうまく行きそうもな 十一時前までに平河町まで行けなかったので、ボイドの作文はやすむ。 好いのが見つからないので、こまって居る。 かえりに須田町あたりまで来ると、もうすてきに降って来てまるで暑い その ちやんちやん、 一寸も雨は小降 雨になやめる 袂 F

十月四日(水曜)

ずいぶん複雑な性格をもって居る人らしい。 見ると、 うものを持って来て置いてくれたそうである。学校へ行ったら皆にわけてやってくれとか 変ふとり返って居たと云う。 で外へ出るにもあんまり心持がよくなかった。 云ったそうだが私はあんな引札くばりみたいなものを出来はしない。 く見えて居た。 十二時頃までねてしまった。 すえ子ちゃんがいつまでも起きて居たので、 河村明子氏が八日の演説会の引札のようなものを沢山と入場券と、 外のうす明りと、 かえりには五時頃小雨が弱く降って、 四時ごろから小此木先生へ行く。 人工の燈火の輝きが美くしい調和を保って居た。 時代の児である。 露子氏に会うと、 皆がねたのは二時近くであった。 夜になってから直行氏が来 田中さんが学校に来て大 天気がはっきりしないの つきはじめた灯が美し だけれどもあ 新真婦 帰 の人 人と云 って ŧ

十月五日 (木曜)

ありながら底の方に不安が流れて居る。

stage-coach について作文

氏は、午後から野本氏を訪ねに行った。 ぎまでかかって明日の作文とこの前のをなおしてしまった。 めには大変悪い。 々のことを考える。 赤子さんがいつまでもいつまでもねて居るので、又よるねないだろうと心配した。 客間の静かなところに座って居ると、ほんとうに私の年には合わ 白秋氏の 『読売』に出された散文は大変私には好いと思えた。 漸々雨は上ったけれどもまだ寒く陰気で、 頭が大変重くなって不快な心 頭 八時 な 直行 のた 1 様 す

十月八日 (日曜) 持がする。

明日 hay-maker

十月九日 (月曜)

明日母上誕生日

formal invitation

十月十日 (火曜)

明日四時小此木先生

十月二十九日(日曜

明日我ドストイェフスキーの誕生日

〔十月中の重要なる出来事〕

十日 母上誕生を生れて始めて自分で祝ってあげる。

十六日 十 四 日 英男大塚のところにて犬にかみつかれ大騒動をしたが、大した事ではなかった。 「彼方に遠く」を書き出した。どうぞよく出来てくれますように!

十七日 紫色のあの皮のがま口をすりにすられた。 三円近く入って居たろう。

二十日 道三氏の結婚

十一月二十三日(木曜)

海と云うので可憐な老爺が出て来る。 今日錦輝館に行って見る。 活動も矢張り彼のもの特殊な面白味を持って居るものだ。 非常に心が動かされた。 かえりに藪そばによる。 魔

に心が 人引 の車で来た人がある。 安らかになった。 終りに近くなって来るに従がって自信が出て来た。 今どきらしいと思う。 「日は輝けり」 がほぼ出来上る 明 Ĥ 0) か 明 で大変

坪内先生のところへ持って行きたいと思う。

十一月二十 应日 (金曜

男爵 中心 がある。 出来なかった。 ならずには居られ れてしまって居ると、 ければならな 人である。 久しぶりで呂昇をきく。 とした談 であるが よくなったのではないらしい。 あん いの 放に 話会 ま ない。 か、 り美くしくもないのに、 私共はああやって土足で踏むボックスのわきに手をついて御辞儀 ――と云うことである。 あとからは気の毒にもなるがそのときはたまらなく不愉快な 人に頭を下げさせて、 真水氏 矢張り美くしい声には違いないが、 の令嬢は、 小此木氏に会う。 妙に 傲慢なのはいやである。 心の素直なところが見える人だ。 平然として見て居られるように、 母親 の性をうけて、 七日にきまった-先とはどこか違ったところ かたくなな 「日は輝けり」は今日 佐藤氏 常識 心持 千葉先生を 心持に 0) が をし に会う。 失わ あ な

明日にする。

十一月二十五日(土曜)

こまれ 借し だって自分できまりが悪かったろう。 小さ のま り 見 やしくな かった。 坪 い二つの目が絶えず私の方を見ては微笑する。 んなかにかさを一寸はさんで居る。 て来た。 ていただけな 日 内先生はほ て一寸微笑した。 か って来た か I) かえりの電車にのるころから 電車 切 ij V) になって漸 の中で大変可愛いおじいさんを見た。 めて下さった。 ので洋傘を一本持って行く。 から、 かえりに白山から車夫が二十銭とる。 先の方は一人でしたままでよかろうとのことである。 々 夕方出来た。 今月中になさらなければならないものが 顔中 ―それより少し前 くにをつれて坪内先生に行く。 の筋肉が皆下の方に流れて来 かえりに銀座でも行って見ようなどと思っ ほんとに可愛い。 女のように内輪に足を並べて、 だまってはやったが、 雨が降って来た番傘を拝 で、 私も た形で、 あって、 天気が少しあ つ 1 大変うれ ゆっく 小さい 車夫 つり そ

十一月二十六日(日曜

の心持、 昨 夜 いからの 親心、 雨が 教育者の苦痛などと云うことからお話がはずんで、とうとうおひるを御 まだ降って居る。 午前中千葉先生のところへあがる。 四十位 の年頃 の女 馳

たりする。 六銭買って来る。 出来たと云わ ックをさほどほめない 夜は久しぶりで楽な心持になって、 走になってしまった。 ったのは 云えばもっともにも考えられる。 如何にも岩村さんらしい。 岩村透氏、 れ る時代に、 千代紙をも買う。 で行かれたそうだ。 大変お気の毒でこまった。 田村松魚氏来訪。 これ丈にまとめる思想がなかった――と云われたそうだ。そう 誰にも云わないでこたえるこれ丈の力を作って置きなす 人形 白山の本屋で、 岩村氏は父の青海波の皿 形から図案があんまり完全すぎると -首人形-かえりに、 ――に買って来た千代紙で着物を着せ 『マダム・ボワリー』 中西屋で、 と例のカンドル、 小さい玩具を一円 を買 ――これの って来 スティ

十一月二十七日(月曜)

趣味 松岡 やが なでられ、むされることがたまらない。 湧い 極まる人なのにおどろいた。 氏 日 南 の夫人は、 風が て来て機嫌が 吹き通した。 矢張りどこかあかぬけて、 悪かった。 寒いのにならされた体には、 松岡氏が鉱山に立つのを祝って小田切、 一寸も智的なところのない、体ばかり大きい人である。 頭 0 落着いたところがあるが、 しんまで、 不愉快になって、 妙にボッテリとした肉感的な風 徳岡 徳岡 妙な 氏 夫婦 焦躁 0) きは、 や不安 を呼ぶ。 無

の毒でもあり、

たのもしくもある。

思わざるを得ない。 あれで満足出来て、 夫婦 の間には大切なことである。 まあそれでもいいから、 一生をともに出来れば、 今日、 味のよい方がおめでたい。 道三さんも要するに、三越の店員が相当だと 中島英之助氏から自著 おめでたいと云う 『町の兄弟』を送

十一月二十八日(火曜

明年洋行でもするようになれば、一寸の金ではすまないのだから、今出来る丈ためておき れは解決された問題ではない。「日は輝けり」の書き始めごろに、充分でないところを思 あの頃の心を思うと、自分の苦しんで居たことが、気の毒になって来る。が、今とてもそ いついた。この頃金のことを考える。今さしあたって、金がどうだと云うのではな 大変よろこびを得たと書いてある。今の私は殆どその反対とも云えるほど心が変って居る。 十七日のところに、レオナルド・ダブィンチの言葉で、 今日は大変時雨れた天気であった。何心なく、日記の前の方を繰返して見ると、 だから来年は、 金銭 の出入帳をつけて見ようかとも思う。こんな気持になると、気 「愛は知の娘なり」と云う言葉を 一月二

十一月二十九日(水曜)

陰気な雨が降りつづいて居る。

寒い。

十一月三十日(木曜)

明日十時半松岡氏□立鉱山に出発

〔十一月中の重要なる出来事〕

十五日 正月号のを坪内先生に見ていただき、 いよいよのせるときめる。

電日氏に図事に下り。 「日は輝けり」と云う題

十七日 瀧田氏来る。ねて居て会わなかった。十六日 瀧田氏に返事をする。

二十五日 「日は輝けり」殆完成

二十六日 千葉先生のところへ行く。

二十七日 『町の兄弟』中島英之助氏(著者)より送り下さる。

十二月六日(水曜)

明日午後三時より作楽館へ

十二月九日(土曜)

なった。 茶色に澱 仕舞った。 足家へ足を入れると、 かなり汽車はすい 起きぬけに文房堂と東京堂とに買物に行く。 夜寒の中を車でゆられて行くのが辛かった。 夜は余りよくねられなかった。 んで居た。 上野へ着いたら、 ては居た。 納豆をかけて道男がせっせと御飯をかっこんで居るのを見たら羨 もういやな心持がして来る。 が、 十五分前になって居る。 郡山 へ着いたのがもうすっかり暗くなってからだったの 翌朝の汽車賃や何かを道男に渡しておく。 かえって仕度をしたら、きちきちになって 随分来たい来たいと思って居ながら、 お風呂が、 道男が待ちくたびれて居たらし 新しい鉄がまなそうで、 かなり 赤

十二月十日(日曜)

寒い。

も目がさめるし、 た話などを聞くと、 になったりした。 だと思えて仕方がない。 快でたまらなかった。この頃妙に金の問題にきたなくなって居らっしゃる。 に不安に迫られてたまらない。 今日道男帰京。 下のものとして居る自分は、 すっかり眠るまで、辛い心持がする。 田辺さんが居られないので、 車を呼んだのがいいとか悪いとか、 いやな心持がして夜安眠出来なくなった。 母さまへ手紙を持たせてやる。自分も一緒に帰りたいような心持 自分の家程いいものはないとつくづく思われる。 ああ支配者としてせくせくして居らっしゃる様子 妙にひっそりして居る。 しきりに御祖母さまが仰云る。 所が変った故かも 一寸雨戸ががたりと云って 近処 U れな 金銭を自 泥棒 いが、 早く何処 けが入っ は 不愉 分の P 妙

十二月十一日(月曜)

かへ行きたい。

いものでもない。 今日は 味噌つきだと云うので、 豆を煮て、ついて、 朝三時頃から祖母様は起きて被居っしゃる。 塩と麹をまぜる。 さほど面白

白いのだろう。 市 次郎と、ふくが一生懸命にやって居る。 夜市次郎に酒をのませてやる。下らないおしゃべりをして夜ふけてから帰 見るよりやって居る当人が景気がよくて、 面

ればと云うのが った嫁は って行った。ごみだらけの、 まだ若い男の心を思うと、 てその覚えが 餅を背負わせて、 面白 あれば、 \ \ \ 俺が引きとると云ってやったそうだ。 帰してやって仕舞った。 むさい娘が一人ころがって居る中に、 可哀そうになって来る。 そしてもし妊娠して居れば、 また嫁を貰うのだそうだ。 当人にきいて、 ボソボソともぐって行 覚えがあ 先に 当人に لخ

十二月十二日(火曜)

えて、 あ振 都を引き払うとき、 な京都の風物が、 言葉をして居る。 か云う話しをして居ると、 自称するとか、 夜 高 る めは、 しきりに三分おき位に出してはながめて居る。五年の間の命がけの努力は、金時計 村 の婆さまが来て、 体 ö 赤沢さんの奥さんは月七円ずつ貰って居ながら、 それと察せらるるほどのひげが鼻の下にちょんぼりと止まって居る。 男の体へ女性の一部分を吹き込んで仕舞ったと云うような体つきをし、 調子をとるためだと、市次郎が云ったとか、 織業仲間でよこしたと云う金時計を見せた。 戸のそとで、 炉ばたで、下らないおしゃべり―― 誰か 人が来た。 田辺氏の養子であった。 婆さんは、 -あさひやの婆が信玄袋をあ 大変それがうれしいと見 月末には 無一 日本橋生れだと 文になると Щ 紫水明 京

である。

つでむくいられて、 又そのむくいに満足して居る人の心は、 どこまでもあのひげの通り

十二月十三日 (水曜

夕方になってから石井の御みよさんが来る。 午前中に味噌をにるとき、 釜をかりた礼に

行って来た礼のようなつもりだったろう。 大変御みよさんは美くしい、 た」と云う村から提起した訴訟事件、それにともなう村の事件が大変面白いと思われた。 ムズムズに動き出して来るようにそう思われた。 夜とまらせる。久し振りで一時過まで種々なことを話し合う。 成熟した女になった。 胸のあたりや膝を見て居ると、 村役場の事件、

「かさぶ

今にも

十二月十四日 (木曜)

ぶちで、額の中央にカールがあって角と角との間に、 いて居る 石井に牛を見に行く。 のと、下等な、 あばずれものとが居る。 面白いものだ。見て居ると、 一匹大変気に入ったのが 同じ牛のなかでも、 一列になって、 切り下げた髪のよう る居た。 上品にして落付 白 黒の

ときでも、 して来るような心持にされる。 な毛が渦巻いて居る。 頭をあげて、ジッと凝視されると、 少し下を向いて、 目も人並みより大きくて、 口を静かに動かして居る。 立派なものだ。 彼等特有の威厳が、 大変碧い。 美くしく、 清く澄んで居る。 自分の方へジリジリと押 落付 Ì 、 た 牛 草をたべる である。 け

事実と架空的な話をごっちゃにして感心して居た。 夜高村の婆さんが仕事を持って来る。 炬燵にあたりながら、 振袖火事の話をしてやる。

十二月十五日(金曜

ふる。 屋づきの女中は、 キイキイした声を出す。 もんぺをはいて居た。 まで行く。 の都合で行か 十二時半頃 感じの悪い男だ。 乗り合いで、そんなにきたなくはない。 れなかった。 の汽 秋田 車で飯坂へ行く。 角屋はかなり大きくてきれいだ。 附近の美くしい女特有の、眼尻の上った、 前に流れて居る河が大きな音をたててながれて居るので、 番頭は扁平な赤面の男で、 福島まで二等で七十五銭やすいものだ。それから自動車 石井のおみよさんも一緒に行くように誘ったけれ共家 何か一言云っては、 一緒に乗った男は、 浴場が、 V 心持よい かつい顔立ちである。 米沢人で、 目をつぶって頭を のが <u>;</u>嬉し 糸織 Ċ 角 屋 部 0)

雨が降

って居るような心持がする。

夜、

いくの家へ行ったが、

留守であった。

電気がくら

\ \ \

十二月十六日(土曜)

らし て来 のである。 癖を出して居る。 ックスをつるして、 をとって大変顔が醜くくなって居る。 天気が る。 いなつ ほんとに山に来たらしい快い心持がした。 かな 昨夜買った玩具を東京へ送ってやるのである。 かし モーターのそばに、 ij 好 みを感じる言葉である。 みじめなようだ。 \ \ \ 薪炭、 少し 米などの類を、 風がある。 「あぶないからさわるなよ」と云う札が立って居る。 一緒に索道へ行って見る。 鼻の頭が絶えず赤くなって、 風呂から上って来て見ると、 かえりに雑誌と、 三四里向うの村から持って来、 モーターで鉄索を廻し、 午後少しあられが降った。 油紙、 桑畑つづきの小道を通っ 糸、 高村 おいくが来て居た。 インク、 の婆のする通 持って行きする それに小さいボ ペンを買っ 田 $i\bar{j}$ 舎 た 年 Ó

十二月十七日(日曜)

昼過てから、 いくの息子が来る。 私を置いてけぽりにした息子はあんなに大人になって

居る なかった。 げになって居て、 との衝突は絶対におこさないものだと思って居るのを見たら、 の人と、 母さまの腰を持って、 人で出か 途中 ので可笑しい心持がした。天王寺の方へ行って見ることにして、おいくさんと娘と五 神のことについて、キリスト教のことについて種々はなした。 ける。 に岩倉公の別邸がある。 道は心持が 朝の霜がとけずに居る。 つりあげるようにしてあげた。 \\ \\ \\ 妾の所有になって居るそうだ。天王寺は、 千人風呂と云うところは、まだ新開で、 大変さむい。 すっかりあたたかになった。 帰途には、 庸之助に会ったようで情け 坂道をあがるに、 自分は理智と感情 あまりよくは すっか 夜、 I) お ĺЪ 祖 か

十二月十八日(月曜)

らしい心持がした。二十四五になって、ああ云う生活をして居るのは、 哀そうな男だ。 し出来ることなら、いつでも話し相手になって居てやりたい。 午後どこかへ行こうとして居たら、いくが来る。かりて居た本を宿の息子にかえす。 弱々しい、人々からとりのぞかれることを、自ら許して居る態度が、 思いやられる。 可

いくと一緒に町を一廻りして来る。到るところにきれいな水が流れて、もうざっと十年

程前 汰が激しくなって来る。 いので、 にとまった和久屋は、 三階の日あたりの だんだん影をかくす宿屋も多かろうと思う。 今とまれない程きたなく見える。 , , いところへ引きこした。 次第に町が栄えるにつ 今まで居た部屋は寒 れ 7 淘

十二月十九日(火曜)

かっ あん 養子が又来る。 る唇を思うと、 ああやって一生過す人かと思ったら、 いときに帰って来ましたと云う。 ああ云うことは、 天気がすっか 雪が、丁度家 たのに……。 なに金のことを云われては、 とまると、 あの り時雨れて、 私にはしてくれないでも かえると、ふくが居ない。 へつくと降って来た。 山の温泉で、一つの命が次第に弱って来て居ることが、 自分も思い私共も思って居るのに、 今にも雪が降りそうだ。 角屋の息子は、 居るのもいやなので、 真個に気の毒になって来た。 いい時に帰って来たとおっしゃるから、 いい。 火を起したりバタバタして居ると、 耕花さんや大観や未醒 夜市次郎、 お祖母さまが急にかえると仰っ かえることにする。 高村の婆さまが来る。 時間表を見たりして居る。 疎髯 の生えた顎 0 画を持って居る。 まざまざと思 私はまだ居た 私も、 田 辺氏の 大変寒 云る。 震え

い浮べられる。

十二月二十日(水曜)

余りみんながいやなことばっかり云い合って居る。 思い切れ 風呂へ入れないのでさむしい。 て仕様がない。 あんな体で働けないものを悪く云う。もうじき死ぬんだもの、それを考えたら、 五円もやりたいと思う。 なことに涙をもよおされた。暮にさしかかって、どんなに困って居るか分らない。 朝起きたときにはまだ雪があったが、午後になって見ると、 てやったっていいだろうのに。 ないからって、 東京の家で、 誰かが一人よくない男だと云うと、 何故あんなに辛い目に会わせるのだろう。 赤ちゃんのよちよち歩くのが見たくなって来た。 東京へ古雑誌を送る。 Cranford をよむ。 大変面白い。 一郎のところへ行って、 誰も彼もが、 知らぬ間にとけて居た。 ほんとに可哀そうだ。 何だかもうかえりたく ワイワイ云って そのみじめ 余り陰気で、 少しはよ 女房を お

十二月二十三日(土曜)

いい 今日 (,) の夕方五時半に道男が来ることになって居るので、迎に行く。 いと仰云るのを強いて行って、石井のおみよさんにあげる 袢 衿と、 お祖母様は行かずと 二葉亭四迷

0) たような心持がした。 『片恋外四篇』 をかって来る。 偉い人だった。だから苦しかったのだ。 一寸よむ。が、 私は二葉亭が文学をいとったわけが分っ

代の犠牲者だ。 ほ 番 か のわきに監禁してあるのだそうだ。一寸もしらなかったが気味がわる 夜石井へ行く。 : 見え な い灯で、 有江のことや、 ふけた夜道をあるくことがたまらない心持がした。 何かをしきりに話す。 徳馬鹿が色情狂になって、 \ <u>`</u> 徳馬鹿なども、 提灯 0) あ 周 Ò 拼 時 丈

十二月二十四日(日曜)

ブルのデザインをして居る。 坂本が迎に来てくれたはい いて見ると、 つかれたときに起るはきそうな心持がしてたまらなかった。 十一時 四十一分ので立って来る。 英・国の二人がねて居て、食堂では木下家具店でエキステンドィング ・いが、すぐ迷子のようになってしまって大変こまった。 混乱してはいたが大変い 二高が休みになって殆ど車室は一杯の有様 Ż 心持になったのは一寸で、 であった。 家につ 神経が

お湯のよくわいて居たのが大変うれしい。

すえ子は大そう大きくなって、 いいお嬢ちゃんになって居る。

[十二月中の重要なる出来事]

二日 百一枚丈瀧田氏に渡す。

七日 作楽会へ千葉先生を中心とした会がある、 出席。

五日 百四十五枚まで渡す。

五.日

全部脱稿、百七十二枚となる。

六日 坂本に持たせてやる。

七日 瀧田氏来訪、 庸之助が心機一転のところと、 最後をなおす。

九日 八日 すっかり出来上り持たせてやる。 安積へ来る。午後六時五十分夏目漱石先生死去せらる。

十一日 夏目漱石氏逝去、発表。

十五日 御祖母様と飯坂角屋へ来る。十九日安積へ帰って来る。

							//	//	3 29	月日		
入学金	受験料	後二来ルモノニ	貧民心理研究	ト翁並ドストイェフスキー-	人及芸術家としての	卒業祝	半紙一帖	万年筆インク一瓶	原稿紙四百枚	摘要		〔金銭出納録〕
	L	-			_							録
						5 500				収入		
2 000	1 500		5 450				080	300	880	支出	〔単位厘〕	

60	春	9 8
210	源氏新やく	
56 000		
5 000	本	
10 000	坪内先生	
15 000	本	
10 000	兄弟へ	
150 000		
	grammer	
	pencil	
	note	
	The story of the world	
12 000	授業校費	
250	徒然草	
300	Fine stories	

									//	//	9 29	//	9 26	9 26
帝劇	おゆき	坪内先生へ					to brother		The prisoner of Zenda	椿姫	二葉亭四迷	底の社会へ	お光壮吉	ガラス戸の内
				7 000				9 000						
3 000	1 000	10 000	道 300		英 1500	道 2500	国 3000		350	400	600	500	550	300

青空文庫情報

底本:「宮本百合子全集 第二十三巻」新日本出版社

1979(昭和54)年5月20日初版

1986 (昭和61) 年3月20日第5刷

※複数行にかかる中括弧には、 けい線素片をあてました。

2012年11月6日作成校正:青空文庫(校正支援)

入力:柴田卓治

2013年1月19日修正

青空文庫作成ファイル:

ました。入力、

校正、制作にあたったのは、

ボランティアの皆さんです。

このファイルは、インターネットの図書館、 青空文庫(http://www.aozora.gr.jp/)で作られ

日記 一九一六年(大正五年)

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 宮本百合子

URL http://www.aozora.gr.jp/

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL http://aozora.xisang.top/

BiliBili https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/ ※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。 http://tokimi.sylphid.jp/